近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ

２０１５（平成２７）年１０月

三重県埋蔵文化財センター

伊坂城跡（北西から）

北山城跡・居林遺跡　弥生時代後期の竪穴住居（東から）

例　　言

1　本書は、平成26年度に実施した近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT－亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査の概要報告書である。

2　調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。

3　調査は、下記の体制で実施した。

委託者　中日本高速道路株式会社

受託者　三重県

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究３課（四日市駐在）

課長　森川常厚

主幹　服部芳人（課長代理）・河尻浩一・松永公喜・浅野陸司・溝田　靖

主査　鈴木規之・宮崎久美・中村法道・水橋公恵・山中由紀子・水谷　豊・山田　猛

主事　矢田　陽・西脇智広

技師　髙松雅文・相場さやか・宮原佑治

4　調査面積・期間等は下表による。

遺跡名（調査次）	調査面積　㎡	調査期間	担当者	作業受託
伊坂城跡（第６次）	7,875 （下層319含）	H26.5.19～H27.3.13	松永・浅野・髙松・西脇	㈱アート
伊坂城跡（第７次）	2,134 （下層94含）	H26.8.20～H27.3.13	河尻・水谷	橋本技術㈱
北山Ｃ遺跡（第５次）	9,047	H26.4.18～H26.9.29	鈴木・山中・水橋・矢田	大成エンジニアリング㈱
北山Ａ遺跡（第６次）	756	H26.6.23～H26.8.6	中村・宮崎・山田	㈱アーキジオ三重
中野山遺跡（第13次）	6,173	H26.4.18～H26.11.25	中村・宮崎・山田	㈱アーキジオ三重
北山城跡・居林遺跡（第４次）	6,948	H26.4.18～H26.12.18	相場・宮原	㈱四門
小牧南遺跡（一次）	165	H26.12.8～H26.12.9	矢田・水橋	（ネクスコ労務提供）
椋ノ木遺跡（一次）	174	H26.6.18～H.26.6.19	服部	（ネクスコ労務提供）
椋ノ木遺跡（一次）	186	H27.3.10～H27.3.11	鈴木・矢田	（ネクスコ労務提供）
椋ノ木遺跡（第２次）	791	H26.10.16～H27.1.13	山中・鈴木	西部緑化(有)
高ノ瀬遺跡（一次）	54	H26.4.09	服部・矢田	（ネクスコ労務提供）
高ノ瀬遺跡（一次）	715	H26.10.1～H26.10.24	水橋・矢田	（ネクスコ労務提供）
小社遺跡（第３次）	2,073	H26.4.18～H26.8.12	河尻・水谷	橋本技術㈱

5　発掘調査及び本書の作成に際しては、千田嘉博先生にご指導とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

6　本書で示す方位はすべて座標北で示している。なお、これまでの調査の経緯から、伊坂城跡は日本測地系、その他の遺跡は世界測地系を用いている。

7　本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。

ＳＨ：竪穴住居　ＳＢ：掘立柱建物、礎石建物、門　ＳＤ：溝、堀切、堀底道、古墳周溝、古墳

ＳＥ：井戸　ＳＫ：土坑、古墳主体部、土壙墓、木棺墓　ＳＸ：中世墓

ＳＺ：石つぶて、階段状遺構、貝殻

本　文　目　次

1　前言……（服部）（1）

2　伊坂城跡（第６次）……（浅野・高松・松永・西脇）（7）

3　伊坂城跡（第７次）……（水谷）（17）

4　北山Ｃ遺跡（第５次）……（矢田）（21）

5　北山Ａ遺跡（第６次）……（宮﨑）（25）

6　中野山遺跡（第13次）……（中村）（28）

7　北山城跡・居林遺跡（第４次）……（相場・宮原）（33）

8　小牧南遺跡（一次）……（矢田）（39）

9　椋ノ木遺跡（一次）……（服部・鈴木）（40）

10　椋ノ木遺跡（第２次）……（鈴木）（41）

11　高ノ瀬遺跡（一次）……（矢田）（43）

12　小社遺跡（第３次）……（河尻）（44）

写 真 目 次

表紙　伊坂城跡遠景

巻頭図版１　伊坂城跡全景
北山城跡・居林遺跡（第４次）
弥生時代後期の竪穴住居

１　前言

写真１　中野山遺跡現地説明会…… 6
写真２　伊坂城跡現地説明会…… 6
写真３　桑名市七和公民館　出前講座…… 6
写真４　伊坂城跡礎石移設　現在の様子…… 6

２　伊坂城跡（第６次）

写真５　北からみた伊坂城全景…… 7
写真６　西からみた曲輪１全景…… 8
写真７　櫓門ＳＢ715 …… 10
写真８　東からみた石つぶて（ＳＺ714）…… 11
写真９　西からみた曲輪２全景…… 12
写真10　曲輪２門（ＳＢ907）…… 13
写真11　堀底道（ＳＤ719）…… 13
写真12　階段状の遺構（ＳＺ908）…… 14
写真13　曲輪４　ＳＺ928の出土状況 …… 14
写真14　出土遺物…… 15
写真15　北からみた曲輪13～16と切岸 …… 15
写真16　上空からみた伊坂城…… 16

３　伊坂城跡（第７次）

写真17　調査区遠景…… 17
写真18　西区　ＳＢ1025…… 20
写真19　西区　曲輪Ｂ犬走り状遺構…… 20
写真20　中区　ＳＫ1011土層…… 20
写真21　東区全景…… 20

４　北山Ｃ遺跡（第５次）

写真22　ＳＤ88, ＳＫ202…… 21
写真23　ＳＤ176土師器鉢出土状況 …… 21
写真24　ＳＤ177土橋状遺構、土師器甕 …… 22
写真25　ＳＤ195円筒埴輪出土状況 …… 22
写真26　ＳＫ152 …… 22
写真27　ＳＫ185砥石・勾玉出土状況 …… 22
写真28　ＳＫ200 …… 23
写真29　ＳＫ182 …… 23
写真30　調査区全景…… 23
写真31　ＳＫ185出土砥石類 …… 24
写真32　ＳＫ185出土臼玉 …… 24
写真33　ＳＫ159出土砥石 …… 24

５　北山Ａ遺跡（第６次）

写真34　北山Ａ遺跡遠景…… 25
写真35　ＳＨ401・ＳＨ302・ＳＫ402 …… 26
写真36　ＳＨ302出土の砥石 …… 26

６　中野山遺跡（第13次）

写真37　ＳＫ1827…… 28
写真38　ＳＫ1838…… 28
写真39　調査区全景…… 28
写真40　ＳＨ1820…… 29
写真41　ＳＨ1820出土土師器甑…… 29
写真42　ＳＢ1812…… 29
写真43　ＳＢ1817…… 29
写真44　ＳＫ1811…… 31
写真45　ＳＫ1828…… 31
写真46　石鏃（上）切目石錘（下）…… 32
写真47　須恵器杯・蓋…… 32
写真48　須恵器甕（ＳＨ1813出土）…… 32

７　北山城跡・居林遺跡（第４次）

写真49　調査区全景…… 33
写真50　ＳＨ482・484・488周辺 …… 34
写真51　ＳＨ402以西の竪穴住居群 …… 34
写真52　ＳＨ465・469・470周辺竪穴住居群 …… 34
写真53　ＳＨ445 …… 35
写真54　ＳＨ459 …… 35
写真55　ＳＨ463 …… 35
写真56　ＳＨ445主柱穴遺物出土状況 …… 35
写真57　ＳＨ402・408・428 …… 36
写真58　ＳＨ449・450…… 36
写真59　ＳＨ462・464…… 36
写真60　ＳＨ449主柱穴土層 …… 36
写真61　ＳＢ409 …… 37
写真62　ＳＢ420 …… 37
写真63　出土土器…… 38
写真64　出土石器…… 38

8　小牧南遺跡（一次）
写真65　Ｔ５全景…… 39
9　椋ノ木遺跡（一次）
写真66　Ｔ３…… 40
写真67　Ｔ８…… 40
10　椋ノ木遺跡（第２次）
写真68　調査区全景…… 41
写真69　ＳＨ１…… 41
写真70　ＳＨ19…… 42
写真71　ＳＨ10カマド…… 42
11　高ノ瀬遺跡（一次）
写真72　Ｔ25全景…… 43
12　小社遺跡（第３次）
写真73　Ａ地区ＳＤ32…… 45
写真74　Ｂ地区ＳＸ53…… 45
写真75　Ｂ地区ＳＫ83…… 45
写真76　調査区全景…… 45

挿　図　目　次

1　前言
図１　遺跡位置図…… 3
図２　伊坂城跡調査区位置図…… 4
図３　北山Ｃ遺跡調査区位置図…… 4
図４　四日市北JCT付近調査区位置図 …… 4
図５　椋ノ木遺跡調査区位置図…… 5
図６　小社遺跡調査区位置図…… 5
2　伊坂城跡（第６次）
図７　遺構平面図…… 9
3　伊坂城跡（第７次）
図８　調査区位置図…… 18
図９　遺構平面図…… 19
4　北山Ｃ遺跡（第５次）
図10　遺構配置図…… 24
5　北山Ａ遺跡（第６次）
図11　遺物実測図…… 26
図12　遺構平面図…… 27
6　中野山遺跡（第13次）
図13　遺構平面図…… 30
図14　出土土器実測図…… 32
7　北山城跡・居林遺跡（第４次）
図15　調査区平面図…… 34
8　小牧南遺跡（一次）
図16　調査坑配置図…… 39
9　椋ノ木遺跡（一次）
図17　調査坑配置図…… 40
10　椋ノ木遺跡（第２次）
図18　遺構配置図…… 42
11　高ノ瀬遺跡（一次）
図19　調査坑配置図…… 43
12　小社遺跡（第３次）
図20　遺構平面図…… 44

表　目　次

1　前言
表１　近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表 …… 2
表２　普及公開活動一覧…… 4
6　中野山遺跡（第13次）
表３　古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居一覧…… 31
表４　古墳時代後期から飛鳥時代の掘立柱建物一覧…… 31
7　北山城跡・居林遺跡（第４次）
表５　弥生時代後期の竪穴住居一覧…… 35
表６　古墳時代前期初頭の竪穴住居一覧…… 37

Ⅰ 前　　言

1．はじめに

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路）の四日市 JCT ～亀山西 JCT にかかる埋蔵文化財発掘調査を、平成 20 年度から実施している。

平成 20 年度から平成 25 年度に実施した発掘調査の概要は、発掘調査概報Ⅰ①、Ⅱ②、Ⅲ③、および同Ⅳ④として、また、平成 20 年度に発掘調査を実施した伊坂窯跡と、平成 21 年度に発掘調査を実施した伊坂遺跡第３次・伊坂城跡第５次調査の結果については、発掘調査報告⑤を刊行し、公表している。その中に当該遺跡の発掘調査成果はさることながら、新名神高速道路事業の概要や発掘調査に至る経緯、保護措置などについても記載しているため、参照されたい。

2．平成 26 年度の調査

（1）現地調査

今年度も、昨年度と一昨年度に引き続き、年間約５万㎡に近い広大な発掘調査面積に対応するため、当埋蔵文化財センター職員全体の約１／３を四日市整理所に駐在させ、当事業に対処した。

年度当初の計画としては、伊坂城跡、北山Ｃ遺跡、北山Ａ遺跡、中野山遺跡、北山城跡、椋ノ木遺跡、小社遺跡の７遺跡の二次調査を計 41,645 ㎡、小牧南遺跡、椋ノ木遺跡、高ノ瀬遺跡の３遺跡の一次調査を計 1,360 ㎡、合計 43,005 ㎡の発掘調査面積が予定された。

年度内には、今年度も用地問題等の進捗を踏まえて、発掘調査計画を確認・共有化する定例会を４回、中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所と行った。

また、今年度は特に、四日市北 JCT 建設予定地内などで、道路建設工事が急ピッチで行われており、中野山遺跡や北山城跡は、隣接した場所での発掘調査となった。そのため、より具体的な工事工程と発掘調査工程との調整が必要となり、適宜、発掘調査現場や四日市工事事務所などで調整協議も行った。

昨年度同様、平成 27 年度末に供用開始を予定している四日市 JCT ～四日市北 JCT 間に所在する遺跡の発掘調査の優先度が高くなった。特に伊坂城跡については、年度初めにようやく伐採が完了したにもかかわらず、年度内での終了を依頼されるという限られた時間の中での発掘調査となった。しかも、１万㎡を超えるという広大な発掘面積であり、高低差は 20 m以上もあるという非常に厳しい条件での城跡の発掘調査に対して、班体制を増やし、且つ、通常は年末までの調査期間を翌年２月まで延長した結果、何とか月末には現地引渡しを行うことが出来た。

その他、北山Ｃ遺跡では、９千㎡を超える調査面積を年度の前半に終了するため、班体制を増やし、また、北山Ａ遺跡や、伊坂城跡（第７次東区）では、先行して発掘調査を完了させ、部分的な現地引渡しなども行った。

結果的には、二次調査は計 35,797 ㎡、一次調査は計 1,294 ㎡、合計 37,091 ㎡の発掘調査を行った。

（2）室内調査

今年度も現地調査に重点をおいたため、室内調査においては出土遺物の洗浄・注記等の一次整理及び遺物実測等の二次整理作業を行ったに止まる。その中で、昨年度調査を実施した発掘調査概報の作成を実施した。

3．その他

調査の概要については、報道機関などへ資料提供を行うとともに、現地説明会を７月 13 日に小社遺跡で、８月 31 日に北山Ｃ遺跡で、10 月５日に中野山遺跡と北山城跡で、11 月 23 日に伊坂城跡で、12 月 14 日に椋ノ木遺跡で実施した。特に、伊坂城跡については、各種団体などから多くの見学依頼の問い合わせがあり、可能な限り対応した。また、地元団体や高等学校への出前講座も行った。

さらに、伊坂城跡の曲輪１で確認した礎石については、地元の八郷地区自治会から移設の要望があり、関係機関が協議を行い、伊坂貯水池の外周道路脇への移設に協力をした。

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅰ』2010

② 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅱ』2012

③ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅲ』2013

④ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅳ』2014

⑤ 三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第５次）発掘調査報告』2011・三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡（第３次）発掘調査報告』2012

No.	遺跡名	所在地	事業地内遺跡面積（㎡）	一次調査後施工可面積（㎡）	20年度 一次調査	20年度 二次調査	21年度 一次調査	21年度 二次調査	22年度 一次調査	22年度 二次調査	23年度 一次調査	23年度 二次調査	24年度 一次調査	24年度 二次調査	25年度 一次調査	25年度 二次調査	26年度 一次調査	26年度 二次調査	遺跡別調査合計面積（㎡）	未調査面積（㎡）	備考
1	伊坂道跡・伊坂城跡	四日市市伊坂町	3,950	0	62 800	3,150													62 3,950	0	調査終了
2	伊坂屋敷	四日市市伊坂町	35,000	0		6,900		2,500							4,100	10,100			0 35,000	0	調査終了
3	北山C遺跡	四日市市西大鳥町 亀石市大字志知	22,000	4,000							600		1,000 4,350		1,000 4,915	9,047			1,600 32,000	6,900	路線内調査終了・路線外工事計画あり
4	狩平遺跡	四日市市北山町	15,500	15,500									500	500					0 0	0	調査終了
5	富士遺跡	四日市市北山町	11,000	11,000					580	380									960 0	0	調査終了
6	北山A遺跡	四日市市北山町	19,000	5,300					950 100	500 2,760	4,130		4,920		756				1,450 13,700	0	調査終了
7	平野山遺跡	四日市市北山町	43,000	0					1,330	880 6,400	10,712		17,933		6,173				2,410 43,000	0	調査終了
8	第二崎古墳群	四日市市小牧町	15,000	0						560 750	9,100		5,319						560 15,000	0	調査終了
9	北出城跡・原林遺跡	四日市市北山町	20,000	2,500						630	6,420		6,450		6,948				620 17,500	0	調査終了
10	笹林古墳群	四日市市北山町	—	—															0 0	—	北出城跡対象範囲に含まれる。
11	小牧南遺跡	四日市市小牧町	20,300	6,459						460	800 165		72 2,371		165				1,497 2,536	6,305	
12	中野平古墳群	四日市市中野町	7,000	7,000									940						940 0	0	調査終了
13	野添御陵山古墳	鈴鹿市川北	1,000	1,000							200								200 0	0	調査終了
14	稲ノ木遺跡	鈴鹿市池底	16,500	15,700									950	360					1,290 791	0	調査終了
15	大久保遺跡	鈴鹿市潤田	12,000	12,000									800						800 0	0	調査終了
16	鈴山遺跡	鈴鹿市青山	8,000	1,500										980					980 0	9,000	新調整池計画あり
17	大伝遺跡	鈴鹿市大久保町	2,200	2,200							180								180 0	0	調査終了
18	高ノ瀬遺跡	鈴鹿市山本町	33,600	17,200							1,580					760			2,340 0	10,238	路線ｶｰﾌﾞ付近計画あり
19	新子遺跡	鈴鹿市山本町	13,500	13,500							800								800 0	5,700	路線内調査終了・路線ｶｰﾌﾞ付近計画あり
20	東荒野遺跡	鈴鹿市山本町	4,900	4,900							500								500 0	0	調査終了
21	小社遺跡	鈴鹿市小社町	12,000	8,025						1,020	400 1,523				2,072				1,420 3,595	329	
22	釜屋内遺跡	鈴鹿市小岐須町	30,000	14,700						2,300	200 8,500		3,200						2,500 11,700	3,600	
年度別調査合計面積（㎡）			335,450	142,493	62 800	9,150	3,060 2,600		7,330 10,910		5,160 14,956		5,222 34,126		1,294 35,797		21,198 103,823		42,072	H27.3.31現在	

表１　近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表

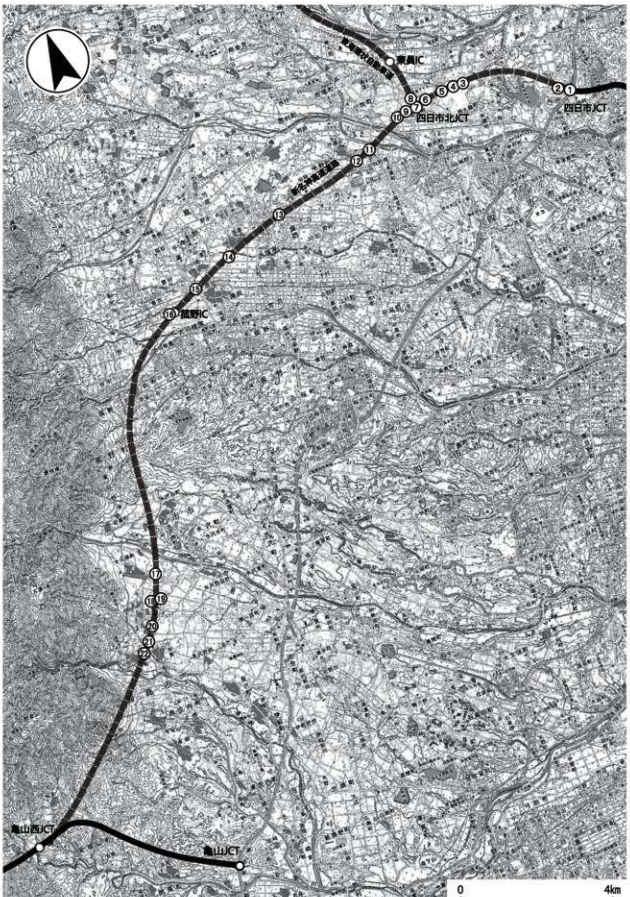

図１　遺跡位置図（1：100,000）

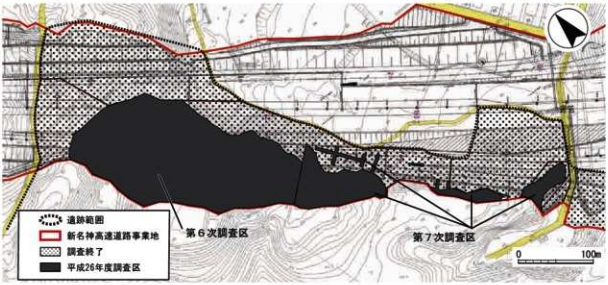

図２ 伊坂城跡調査区位置図（1：5,000）

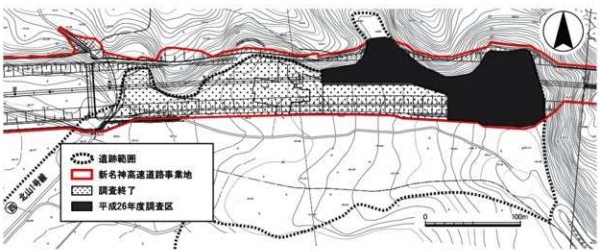

図３ 北山Ｃ遺跡調査区位置図（1：4,000）

内　容	所在地・会場	開　催　年　月　日	参加人数	備　　考
八郷の歴史探検隊 出前講座	八郷地区市民センター	平成２６（２０１４）年６月２３日（月）	15　名	
小社遺跡（第３次） 地元説明会	鈴鹿市小社町	平成２６（２０１４）年７月１３日（日）	44　名	
北山Ｃ遺跡（第５次） 現地説明会	桑名市志知	平成２６（２０１４）年８月３１日（日）	179　名	
中野山遺跡（第１３次）、北山城跡・居林遺跡 （第４次）現地説明会	四日市市北山町	平成２６（２０１４）年１０月５日（日）	92　名	
桑名市　七和公民館 出前講座	七和公民館	平成２６（２０１４）年１０月２４日（金）	15　名	
八郷の歴史探検隊 出前講座	八郷地区市民センター	平成２６（２０１４）年１０月３１日（金）	25　名	
伊坂城跡（第６次・第７次） 現地説明会	四日市市伊坂町	平成２６（２０１４）年１１月２３日（日）	457　名	
椋ノ木遺跡（第２次） 現地説明会	三重郡菰野町池底	平成２６（２０１４）年１２月１４日（日）	124　名	
北星高校 出前講座	北星高校	平成２７（２０１５）年１月１８日（日）・２２日（木）	22　名	１月18日：12名　１月22日：10名

表２ 普及公開活動一覧

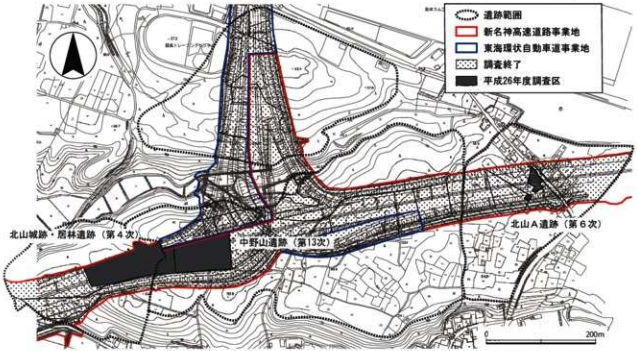

図４ 四日市北 JCT 付近調査区位置図（1：7,000）

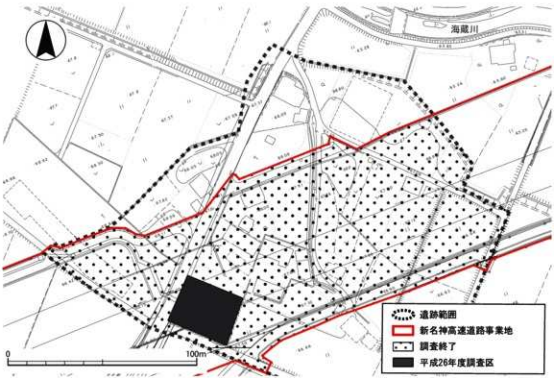

図５ 椋ノ木遺跡調査区位置図（1：2,000）

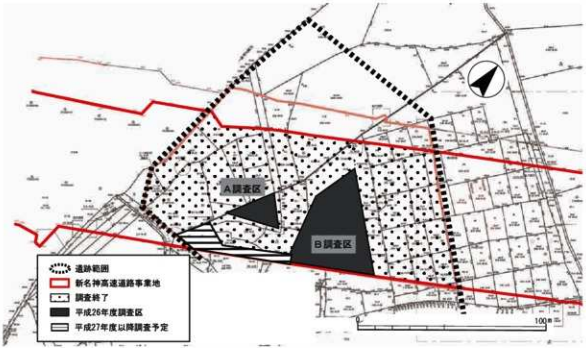

図６　小社遺跡調査区位置図（1：2,000）

写真１　中野山遺跡現地説明会

写真２　伊坂城跡現地説明会

写真３　桑名市七和公民館　出前講座

写真４　伊坂城跡礎石移設　現在の様子

2　伊坂城跡（第６次）

１．はじめに

伊坂城跡は、四日市市伊坂町に所在する戦国時代の城館跡である。城は朝明川と員弁川にはさまれた朝日丘陵を利用しており、その地形と平野部との比高差をうまく配慮した選地といえる。周辺には西之広城跡のほか、萱生城跡・大矢知城跡・市場城跡などの中世城館跡がある。

伊坂城跡の遺跡範囲は東西約650 m、南北約130 mで、標高 84 mを最高点とする曲輪１とその東にある曲輪２を中心にして、いくつもの平坦地が階段状に東方向へ連なる。さらにその東に丘陵平坦面をうまく利用した東西 300 m以上、南北約 130 mの平坦地が広がる。

伊坂城跡では平成 11 ～ 25 年度に第１～５次調査を実施しており、合計 19,418 ㎡の範囲について発掘調査を行った[8]。これまでの調査は、東半の広大な平坦地を中心に行っており、戦国時代の道路状遺構・溝や段状の地形で区画された屋敷地とそれに伴う建物などを確認した。

本年度は第６次調査と第７次調査を実施しており、第６次調査は本丸に相当する曲輪１の北半分と二の丸に相当する曲輪２、およびその北側に広がる平坦地を対象としている。その面積は 7,875 ㎡で、調査期間は平成 26 年５月 19 日～平成 27 年３月 13 日である。

これまでの調査が麓の屋敷地を中心としているのに対して、第６次調査は城館の主要部を対象とする。調査の結果、曲輪１～ 16 のほか、斜面を人工的に削り落として防御性を高める切岸、堀切２条、掘立柱建物４棟以上、井戸１基などが確認できた。特に曲輪１において櫓門１棟、床面積 100 ㎡に迫る掘立柱建物１棟、曲輪２で門と考えられる遺構１基とカマドの可能性をもつ土坑１基、曲輪３で石つぶて遺構などを確認できた点が大きな成果といえる。

（浅野）

写真５　北からみた伊坂城全景

2．曲輪１

曲輪１は、伊坂城の最も高い位置を占める曲輪で、いわゆる本丸に相当する。曲輪１は一辺約50ｍの方形を呈しており、周囲を幅６ｍ、高さ約２ｍの土塁で囲まれている。発掘調査は、曲輪１の北半分を対象とした。曲輪１への入口は東辺に取り付き、堀底道ＳＤ719から入る構造となっている。この入口（虎口）には礎石を伴う門ＳＢ715を構えていたことが調査で明らかになった。

曲輪１の内部は段によって大きく二分されている。虎口から下の段に入り、下の段を経て上の段に上がる構造をとる。下の段は調査範囲が限られたため、建物の検出には至らなかった。上の段では掘立柱建物３棟以上、井戸１基などが確認できた。

（１）掘立柱建物

ＳＢ725　掘立柱建物のうち、ＳＢ725は南東-北西方向に主軸をとる７間×２間の建物である。桁行は14.3ｍ、梁行は東側で７ｍ、西側で6.5ｍとなっており、わずかに台形状を呈する。柱間寸法は桁行約２ｍ、梁行3.2～3.5ｍとなる。柱穴は直径80cm前後、深さ80cm程度と大きいことから、主に側柱によって上部の荷重を支えていたと考えられる。なお、建物の内側には小穴がいくつか認められることから、床束を据えた可能性がある。ＳＢ725の床面積は96㎡であり、第６・７次調査で見つかった建物のなかで規模が最も大きい。位置や規模などから、中心的な建物と評価できる。

なお、ＳＢ725の南東隅には東西3.4ｍ、南北2.6ｍ、深さ20cmの隅丸方形の土坑（ＳＫ717）がある。この土坑は南東隅土坑の一種の可能性がある。この場合、ＳＢ725の土間あるいは玄関に相当することになろう。

ＳＢ724　南西-北東方向に主軸をとり、５間×１間の建物である。桁行9.3ｍ、梁行3.8ｍで、梁行の柱間寸法が長いため、間に床束を設けた可能性がある。周囲に多数の柱穴が認められるため、ＳＢ724は幾度か建て替えが行われたことがわかる。前述のＳＢ725と直交する主軸をとることから、関連性がうかがえる。

ＳＢ726　南西-北東方向に主軸をもつ建物で、南半は調査区外へと続く。その規模は桁行２間以上、梁行３間で、柱間寸法は桁行３ｍ、梁行1.9ｍとなる。柱穴は直径40～50cm、深さ60cm程度である。ＳＢ

写真６　西からみた曲輪１全景

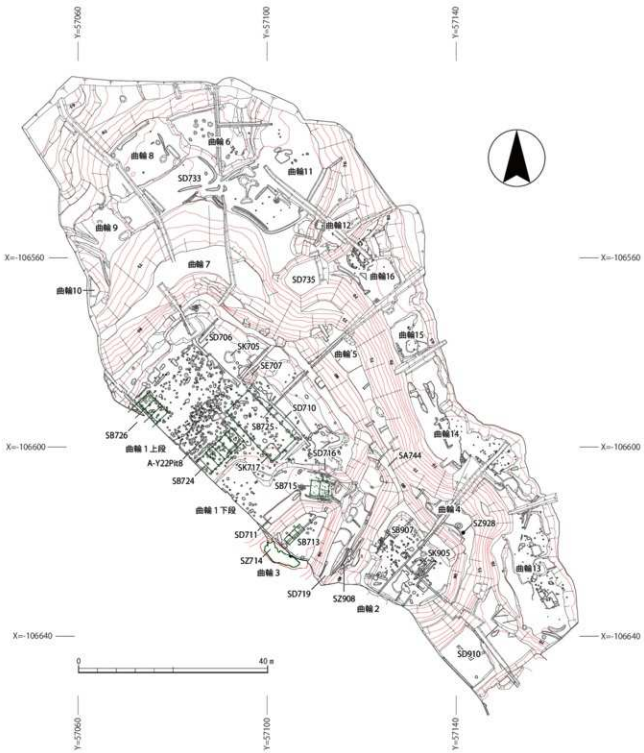

図7　遺構平面図（1：800）

写真７　櫓門ＳＢ715

725が中心的な建物とすれば、ＳＢ726は城主が普段生活していた建物に関連する可能性があろう。

（２）櫓門（ＳＢ715）

ＳＢ715は礎石を用いた門で、間口１間、奥行２間、柱間寸法は間口3.2ｍ、奥行1.9ｍである。主要な柱を据える礎石６石には長辺80cm前後の大きな板石が用いられている。さらに前列・中列の４石には、添え柱を据えた小さな礎石がそれぞれ配される。その大きさは長辺40cm程度で、いずれも土塁の裾に接するように配石されている。

ＳＢ715は、高さ３ｍ以上の土塁に挟まれていること、重量物に耐え得る大きな礎石の存在などから、櫓門に復元できる。櫓門とは１階が門、２階が櫓となっている門をさす。大別すると、２階が単独の櫓のもの と、２階が廊下のようになっているために土塁と土塁の間を行き来できるものがあり、ＳＢ715は後者に当てはまる。ＳＢ715はＳＤ711・716よりも後に建てられたことが遺構の重複関係から判明していることから、改築に伴って建てられたと考えられる。この櫓門によって伊坂城の防御性はさらに高まったといえる。

（３）溝（ＳＤ706・710）

ＳＤ706・710ともに幅75cm、深さ５～15cm程度の浅い溝である。これらの溝より南側で建物、北側で土坑・井戸が認められることから、曲輪１を区画する役割を果たしていたといえる。またＳＢ725の桁行と主軸を揃えていることから、雨落ち溝としても機能していたと考えられる。

（４）井戸（ＳＥ707）

上部において一辺3.8ｍの方形を呈する深さ４ｍの井戸である。底部において滞水に伴う変色などは明確ではなかったため、豊富な湧水の可能性は低い。溜め井戸のようなものだったと考えられる。埋土に多数の礫が充填されていたことから、改築に伴う地山掘削で生じた礫を投棄したものと推測される。

（５）土坑（ＳＫ705）

ＳＫ705は長径2.8ｍ、短径2.4ｍ、深さ27cmのいびつな円形の土坑である。この土坑から土器とともに多くの二枚貝が出土した。このＳＫ705はＳＤ706よりも北側に位置していることから、建物が並ばない区画に設けられたと考えられる。

（６）小穴（A-Y22Pit８）

ＳＢ724と重なるように検出した小穴である。直径100cm、深さ50cmで、小穴とほぼ同じ大きさの常滑製品の甕が収められていた。その特徴から16世紀前半の甕と考えられる[2]。なお、甕の中から別の遺物は出土しなかった。　（髙松）

写真８　東からみた石つぶて（ＳＺ 714）

３．曲輪３

曲輪３は、曲輪１東側を囲む土塁の一部をさす。ここから礎石建物１棟と集石（石つぶて）遺構が見つかったため、他の土塁と区別するために便宜的に曲輪３と呼称する。その範囲は南北16 m、東西８ｍで、曲輪１との比高差は３ｍ、堀底道ＳＤ 719 との比高差は６ｍを超える。なお、発掘調査範囲外となるが、曲輪３の南にも平坦地が伸びていることから、これらが一連となって、曲輪１の東側を強固に防御していたと考えられる。

（１）礎石建物（ＳＢ 713）

礎石建物ＳＢ 713は、梁行３間（4.5ｍ）、桁行１間以上（1.6ｍ）で、梁行の柱間寸法は1.9ｍ・0.9ｍ・1.8ｍと中央で短い。礎石は、７個が残存しており、長辺約 25 ～ 40cm といずれも小さな平石を用いている。礎石の配置と曲輪３の西側に偏った位置で礎石が確認されたことなどから推測すると、梁行は東側にもう１間延びて、本来３間×２間だった可能性がある。

（２）石つぶて（ＳＺ 714）

礎石建物の南側において、多数の石がまとまった遺構を確認した。この集石遺構は、曲輪１へと至る堀底道ＳＤ 719 を見下ろせる位置にあることから、高低差を利用して、眼下の敵に投げつけるための石つぶてと考えられる。

石つぶては、曲輪３の礎石建物の南に７×３ｍの範囲に広がり、厚さは約 30cm である。概ね２層に積み重なっていることから、その数は 3,000 個と推定される。石の大きさはこぶし大のものが多く、計測すると重さが 400 ～ 500 ｇのものが最も多かったが、長径 20 cm、重さ３kgを超えるものもあった。

石つぶての大きさ・形状に類似した礫が地山に多数含まれることから、伊坂城の築城・改修時に生じた礫を石つぶてとして利用したと想定される。

（３）曲輪３の断ち割り

曲輪３を断ち割った結果、下部は地山削り出し成形、上部は盛土成形であることが判明した。上部の盛土は厚さ約２ｍで、盛土の中ほどから常滑製品の甕が出土した。中野晴久氏の編年によると、この甕は 11 型式に相当し、16 世紀前半ごろのものと考えられる。伊坂城跡の築城・改修時期を探る手がかりとなるだろう。　（松永）

写真９　西からみた曲輪２全景

４．曲輪２

曲輪２は、曲輪１の東に位置する南北 20 m、東西 19 mで、台形状を呈する曲輪である。曲輪２の北側には曲輪４、東側には堀切のＳＤ 910 が位置する。曲輪２は四方を土塁に囲まれているが、南東隅・北東隅は流出等により失われている。北側・西側の土塁は遺存状態に恵まれ、高さ１m程度、下端幅３m程度を測る。このうち、西側の土塁には中央付近で途切れた部分があり、この地点で門ＳＢ 907 が検出された。これによって、曲輪２の平坦面への経路は、堀底道ＳＤ 719 から曲輪２の西側斜面を登っていたことが判明した。

なお、曲輪２から曲輪１へ直接行く経路は、ＳＡ 744 に限られており、両曲輪の連結が良好ではない。堀底道ＳＤ 719 によって曲輪１と曲輪２が分断されていることが、伊坂城の大きな特徴といえる。

曲輪２の遺構として、門ＳＢ 907、カマドの可能性をもつＳＫ 905 などを確認した。また堀底道ＳＤ 719 からＳＢ 907 へと登る位置で階段状の遺構ＳＺ 908 を確認した。遺物として中世の土師器・陶器のほか、北側の土塁盛土から貝殻が出土している。

（１）門（ＳＢ 907）

西側土塁が途切れて虎口状を呈する位置で検出した。ＳＢ 907 は長さ 4.5 m、幅 0.56 m、深さ 0.37 mの溝とその両端で検出した柱穴からなる。柱穴は直径 35cm、深さ 0.6 ～ 0.7 m、柱間寸法約 3.8 mである。これらの状況から、ＳＢ 907 は主柱２本からなる門と考えられる。礎石を用いていない点が、曲輪１の櫓門ＳＢ 715 と大きく異なる特徴といえる。

遺物として溝の西側から、長さ８～９cmの青銅製品が出土した。ＳＢ 907 に伴う金具の可能性が考えられる。

（２）カマド（ＳＫ 905）

ＳＫ 905 は、曲輪２のほぼ中央に位置し、長辺 3.6 m、短辺 2.4 m、深さ 0.35 mのいびつな長方形を呈する。土坑の北東隅には焼土・炭・被熱した石材がまとまっていた。こうした状況から、土坑の北側は燃焼部、南側は作業場だったと考えられる。県内における類例として、津市多気北畠氏遺跡上村地区ＳＦ２などが知られており、中世のカマドの可能性が指摘されている[9]。詳細な検討は今後に委ねるとして、ＳＫ 905 についてもカマドの可能性をあげておきたい。

写真10　曲輪２門（ＳＢ907）

写真11　堀底道（ＳＤ719）

（３）階段状の遺構（ＳＺ908）

曲輪２の西側斜面で検出した階段状の遺構で、その範囲は南北約７ｍ、東西約３ｍの範囲をさす。ＳＺ908はＳＤ719のやや南寄りから曲輪２の門ＳＢ907へ斜めに登るように取り付く。ＳＤ719とＳＢ907の比高差は約４ｍを測り、正面から登ると急斜面となる。こうした点を配慮して斜めに登る階段状の遺構を築いたのかもしれない。ただし、遺存状態に恵まれなかったたこと、類例に乏しいことから、事例の紹介にとどめておき、詳細な評価は控えておきたい。（西脇）

５．曲輪４

曲輪４は東西約20ｍ、南北約6.4ｍで三日月形を呈する。曲輪２平坦面から曲輪４までの比高差は約４ｍを測る。当曲輪の平坦面はごく狭く、建物等の遺構は確認できなかった。曲輪の形状・大きさ、曲輪２との位置関係から、主要な曲輪というよりも帯曲輪としての性格が強いものと考えられる。

曲輪４では、ＳＺ928において大量の貝殻を確認した。その範囲は長辺2.2ｍ、短辺0.64ｍ、厚さ0.2ｍ程度であった。出土した貝の種類は二枚貝が多いが、約15㎝の巻貝も含まれている。また、貝殻とともに羽釜も出土しており、伊藤裕偉氏による編年のⅢｂ～Ⅲｃ期に相当する。したがって、ＳＺ928の時期は15世紀後半～16世紀前半とみなせる。ＳＺ928は地山直上、あるいはわずかにその上層に位置する程度であることから、伊坂城の使用された期間のなかで比較的早い段階に形成されたことが分かる。

貝殻はＳＺ928のほか、曲輪１ＳＫ705、曲輪２の土塁中、曲輪11盛土中においてもまとまって出土している。曲輪４を曲輪２の帯曲輪として評価するなら、曲輪４内だけではなく、曲輪２の機能と併せて考えるべきものであろう。

この他、曲輪４の流土から瀬戸美濃製品・常滑製品のほか、明の染付碗などが出土している。これらは16世紀前半を中心とするが、一部16世紀後半の製品も含まれる。これらは曲輪２から廃棄された可能性があるため、両曲輪の関連性を踏まえておく必要がある。（西脇）

写真12　階段状の遺構（ＳＺ908）

写真13　曲輪４　ＳＺ928の出土状況

６．そのほか

（１）堀底道（ＳＤ719）

ＳＤ719は曲輪１・２を分断する位置にあり、下端幅4.3ｍ、深さ4.5ｍ以上を測る。麓の屋敷地から曲輪１に至る道としての機能と、曲輪１・２を防御する堀としての機能を兼ねている。したがってＳＤ719は堀底道と評価できる。

堀底道は相対的に古く、やがて堀と道に分化する。ＳＤ719の存在によって伊坂城は、堀と道が未分化の段階にある、あるいは堀と道の分化を採用しない城づくりの系統にあることを示している。また、堀底道は、いわゆる織豊系城郭[1]にはみられない特徴といえる。他の諸点も考慮すれば伊坂城跡は、織豊系城郭とは異なる城づくりの系統にあると評価できる。

（２）堀切（ＳＤ910）

曲輪２の東側に位置する下端幅12ｍ、深さ２ｍ以上の堀である。南北方向に主軸をとり、この堀によって防御性の高い曲輪１・２とそれより東の平坦面を大きく分断している。こうした特徴からＳＤ910は堀切といえる。

（３）切岸と曲輪13～16

曲輪１・２などは周りを斜面に囲まれている。この斜面は自然地形ではなく、人工的に削り落とすことで急な斜面を形成したものであることが判明した。いわゆる切岸である。この切岸によって斜面は急になるが、切岸下端には削った範囲に平坦面が形づくられた（曲輪13～16）。曲輪13～16は、幅８～10ｍ程度で、帯状に連なる。この曲輪13～16から麓までは再び斜面が続き、やがて谷底に至る。

この斜面は人工的な掘削・整地などが認められなかったことから、自然地形と判断した。この自然地形の斜面から谷底の範囲は、城域外といえるだろう。

（４）堀切ＳＤ733北側の平坦面

堀切の機能を果たすＳＤ733より外側において、いくつかの平坦面が確認できた（曲輪６・８・11）。これらの曲輪を断ち割った結果、いずれも盛土よって平坦面を形成していたことが判明した。旧表土直上および、盛土中・検出面において中世の土師器・陶器が出土したことから、当該期の遺構と判断できる。これらの曲輪において明確な建物は確認できなかったが、非常時などに多くの人が集まった際に、小屋掛けのための空間などとして利用された可能性

がある。詳細な検討が今後求められるが、ひとまず伊坂城に伴う遺構とみなしておきたい。

（5）下層の調査

曲輪1と曲輪7について下層の調査を行った。その結果、曲輪1では北東隅付近で、溝ＳＤ716が検出できた。曲輪7では地滑りによって堆積した層が確認できた。さらに地滑り層の下において溝を確認した。この溝からは、15世紀後半にさかのぼる可能性をもつ土師器の羽釜が出土した。これにより、伊坂城の築造時期は、おおむね15世紀末後半～16世紀初めに絞ることができる。（高松）

7．遺物

伊坂城跡では、中世の土師器・陶器を中心に、中国（明）の染付皿、銭貨23点、火縄銃の弾1点、鉄製品44点以上、青銅製品6点、多量の貝殻などを確認した。土師器として皿・羽釜など、中世陶器として瀬戸美濃製品の天目茶碗・皿類・擂鉢、常滑製品の甕が確認できた。総体として16世紀前半のものが多く、その前後のものも認められる。火縄銃の弾は直径11㎜、6.73ｇの鉛製で、劣化のためか、やや小さい[8]。銭貨については寛永通宝8枚を除くと、

写真14　出土遺物

中国からの渡来銭で唐銭から明銭まで多岐にわたる[9]。

伊坂城の築造時期を知る遺物として、15世紀後半に遡る可能性をもつ土師器の羽釜が出土している。したがって伊坂城は15世紀後半～16世紀初めに築造されたと考えられる。一方、曲輪1などで16世紀後半の瀬戸美濃製品が出土していることから、伊坂城は当該期まで使用されたと考えられる。第1・2次調査における麓の屋敷地における調査でも、同様の時期の土器が出土しており、大きな齟齬はない。

（高松）

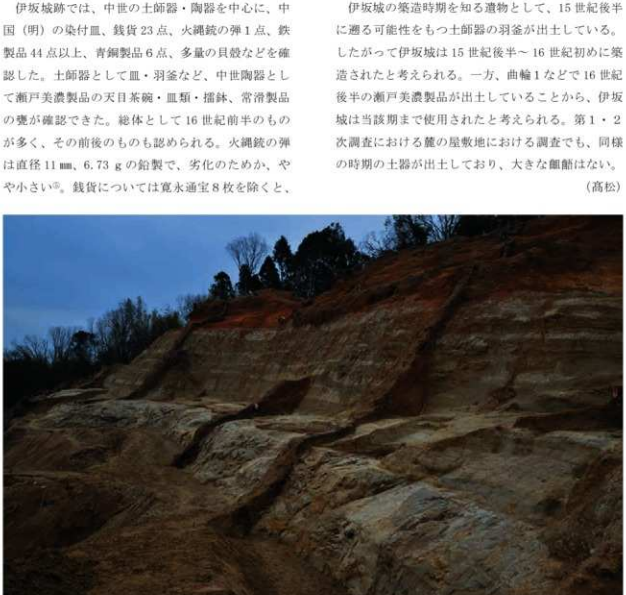

写真15　北からみた曲輪13～16と切岸

写真16　上空からみた伊坂城

8．まとめ

以上から、伊坂城は15世紀後半～16世紀初めに築城されたこと、その後約100年使用されたことが出土遺物から明らかになった。約100年間の使用期間には何度かの改修を試みていることも遺構の重複関係から明らかになった。最も注目すべき遺構の櫓門ＳＢ715は、ＳＤ711・716よりも後に築かれていた。この改修によって城の守りを強固なものとし、その性格を著しく変化させたことが明らかになった。また、堀の底を道として利用していることから、織豊系城郭とは異なる特徴がうかがえる。こうした点から、伊坂城は地域での城づくりを高度に発達させた事例と評価できよう。

今回の調査において城主に関する知見は得られなかった。文献史料の検討から城主の検討を行うとともに、大規模な改修を可能とした背景についても、今後検討が求められるだろう。　（髙松）

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡発掘調査報告』2003

三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡（第３次）発掘調査報告』2012

三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT－亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅳ　2014

② 遺物の編年観や名称等などは下記文献による。

常滑：中野晴久「湯呑・常滑」『中世窯業の諸相』2005

愛知県『愛知県史』別編窯業３中世・近世常滑系　2012

瀬戸美濃：藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』高志書院　2008

藤澤良祐「瀬戸美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化　財センター研究紀要』第10輯　2002

愛知県『愛知県史』別編窯業２中世・近世瀬戸系　2007

土師器：伊藤裕偉「中北勢地域の中世土器」『三重県史』資料編考古２　三重県　2008

③ 三重県埋蔵文化財センター『多気遺跡群発掘調査報告Ⅱ』1996

④ 千田嘉博『織豊系城郭の形成』東京大学出版会　2000

⑤ 金子浩之「城館跡出土銃・砲弾への評価」『中世城館の　考古学』高志書院　2014

⑥ 永井久美男編『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会　1994

3　伊坂城跡（第７次）

１．はじめに

第７次調査は、同じく今年度に発掘調査を行った第６次調査の東隣に位置し、西区・中区・東区の３カ所に分けて調査を行った。中区の北側斜面は第４次調査を平成22年度に行っている。東区は丘陵東斜面、中区・西区は大半が北斜面に位置しており、中区・西区については斜面の一部をトレンチ調査している。調査面積は2,134㎡(下層94㎡含む)である。

２．遺構

（１）西区

第６次調査曲輪２の東に位置する調査区で、曲輪２とは堀切ＳＤ910により隔てられている。調査区北側は斜面であり、南側の平坦部は段状の平坦地が３カ所（西から曲輪Ａ、曲輪Ｂ、曲輪Ｃ）確認できる。

曲輪Ａは、南北約30ｍ、東西最大約12ｍの曲輪が想定される平坦地であるが、調査地はその北部の南北約16ｍである。北東隅には登り口の可能性のある階段状の地形がみられる。曲輪Ａの東斜面は急斜面に削られており（ＳＤ1011）、曲輪Ａと曲輪Ｂの高低差は約２ｍである。曲輪Ａでは掘立柱建物３棟（ＳＢ1025・1026・1027）と方形土坑（ＳＫ1016・1021）、雨落ち溝の可能性のある溝（ＳＤ1028・1029）などを検出した。掘立柱建物はいずれも柱穴が径20㎝程度と小さなもので、柱通りや柱間もあまり揃わないことから、簡易的な建物であったと考えられる。

曲輪Ｂは、東西約15ｍの平坦地で北東隅に高まりがみられる。盛土と考えられる上面を遺構検出面として検出を行ったが、遺構は確認できなかった。この盛土をトレンチ掘削した際に須恵器が出土したため、古墳および下層遺構の可能性が考えられたことから、１面調査終了後盛土状況の土層観察及び下層確認を行った。その結果この高まりは西側を盛土成形した後、高まりの幅をさらに拡張するために東側に盛土を行っていることが明らかとなった。盛土からは中世後期の遺物が出土しており、伊坂城の改修に伴い土塁が拡張された可能性が考えられる。下層

写真17　調査区遠景（東上空から）

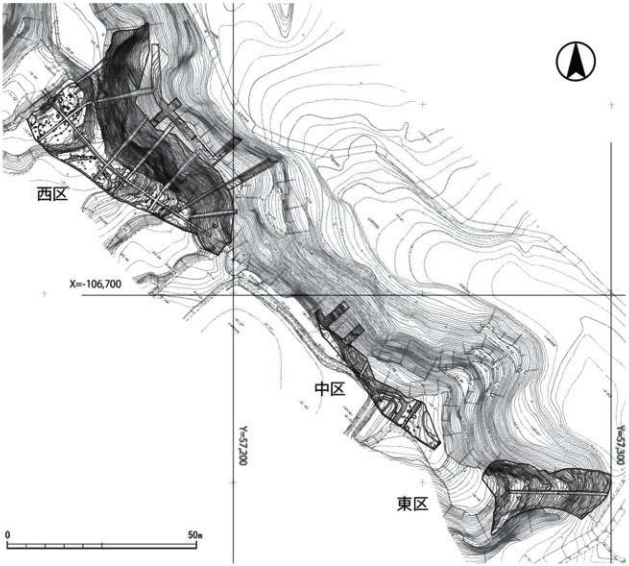

図８　調査区位置図（1:1,000）（調査前地形図に合成）

遺構は確認されなかった。

曲輪Ｂからは、曲輪Ａの北裾を通り、第６次調査の帯曲輪に続く犬走り状の平坦地が確認された。通路と考えられる。

曲輪Ｂと曲輪Ｃとの間の斜面はなだらかである。曲輪Ｃは、調査区の南端が１段低くなることから、調査区外に区画が展開するものと思われる。斜面からは土師器羽釜がまとまって出土した。北側は通路として利用されたと思われる曲輪Ｂから続く平坦地がある。

（２）中区

中区は、溝で区画された東西約 50 m の曲輪と想定される場所の北東端にあたり、北側斜面の段状地形を第４次調査として実施している。検出した遺構は土坑２基と溝がある。土坑ＳＫ 1001 は南北約 1.2 m × 東西約 0.9 m、ＳＫ 1002 は南北約 1.1 m × 東西約 0.8 m の隅丸方形を呈する土坑で、いずれも壁が熱を受けて硬化・赤変し、埋土は炭化材が厚く堆積する。狼煙、屋外炉などの可能性も考えられるが、ＳＫ 1002 からは骨片が出土しており、火葬土坑と考えられる。ＳＫ 1001 も同様であろう。炭化材の一部が掘り返されていることから、ここで荼毘に付した後、他の場所に埋葬したものと考えられる。

調査区中央部では周囲を溝で囲んだ土壇状の遺構を確認した。調査区南部にも広がっており、東西約 5.0 m で周囲に溝が巡る。上面では明確な遺構は確認できなかったが、トレンチ掘削の際、下層包含層と考えられる層が確認され、須恵器片が出土したこ

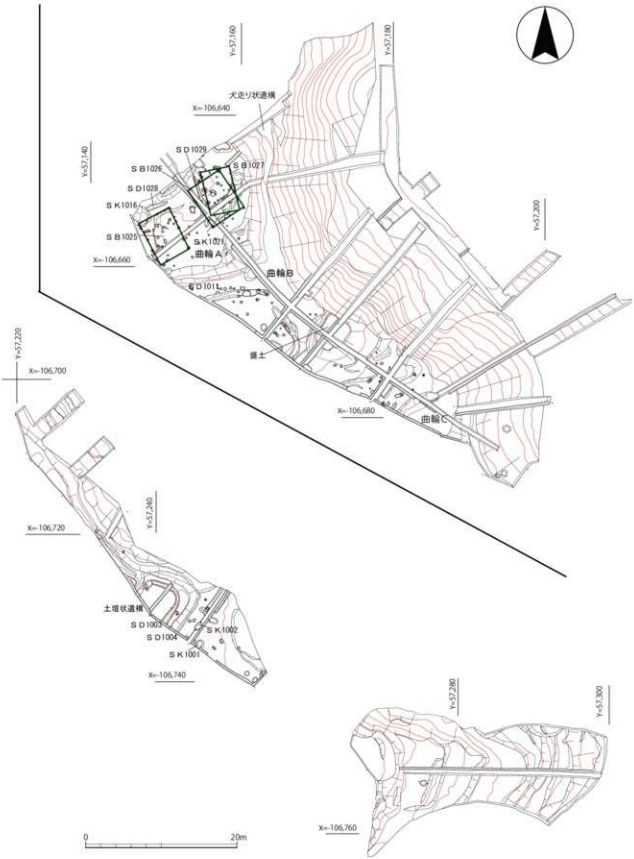

図９　調査区平面図（1：500）

とから、下層調査を行った。下層では上層とは異なるL字に曲がる溝及びピットなどを確認したが、遺構からは遺物が出土しておらず、時期は不明である。

（3）東区

丘陵東端に位置する調査区で、斜面に位置する。明確な遺構は確認できなかったが、斜面を削って成形したと考えられる平坦面と階段状の通路になる可能性のある平坦面を確認した。その他の遺構は土坑状の浅い落ち込みを1基確認したのみである。

3．出土遺物

第7次調査で出土した遺物は、コンテナバットで15箱、約31.5㎏である。古墳時代から古代の須恵器も出土しているが、出土遺物の大半は中世後期の土師器・陶器である。瀬戸美濃産陶器は、藤沢編年の古瀬戸後Ⅳ期～大窯第3段階[1]に属しており、15世紀後半から16世紀後半までの遺物と考えられる。

4．まとめ

伊坂城跡第7次調査は、屋敷地と想定される範囲の北西端にあたり、平坦面は非常に狭く、遺構は調査区外の南側に広がると考えられる。西区では、西端の最も高所にあたる曲輪Aで掘立柱建物3棟とそれに伴う土坑、溝を確認した。第6次調査区曲輪1、2を防御するための見張りのような場所であった可能性が考えられる。それ以外では調査範囲の制約もあり明確な遺構は確認できていない。中区では、火葬土坑と考えられる遺構を2基確認した。出土遺物がなく、伊坂城や屋敷地に伴う遺構であるかどうかは今後の課題である。

出土遺物では、遺構には伴わないものの須恵器が複数出土している。過去の伊坂城跡の調査でも古墳時代の竪穴住居や土坑などが見つかっており、丘陵全体に伊坂城築城以前の集落が存在していたものと思われる。

【註】

① 瀬戸美濃産陶器の編年については、愛知県史編さん委員会『愛知県史　別編　窯業3　中世・近世　瀬戸系』（愛知県 2007）を参考とした。

写真18　西区　ＳＢ1025（南から）

写真19　西区　曲輪Ｂ犬走り状遺構（東から）

写真20　中区　ＳＫ1001土層（北から）

写真21　東区全景（東上空から）

4　北山C遺跡（第５次）

１．はじめに

北山C遺跡は員弁川と朝明川との間、標高約60ｍの台地上に位置し、桑名市・東員町・四日市市にまたがる広大な遺跡である。

従来は弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡と考えられてきたが、平成24年度の第２次調査において古墳10基が確認され、古墳時代中期の古墳群でもあることが判明した。

今回の調査区は台地東端に位置し、遺跡の東端でもある。面積は9,047㎡である。

なお、古墳は西山古墳群に属するため、調査完了をもって「西山○号墳」という名称を付与する予定であるが、平成27年度にも調査を行う区域があることから、本報告文中では調査中の遺構名称をそのまま使用する。

２．遺構と遺物

古墳25基と墳墓（土壙墓・木棺墓）16基・掘立柱建物１棟・土坑３などを確認した。

墳墓については土層観察等で棺の痕跡を確認できたものを「木棺墓」、確認できなかったものを「土壙墓」と表記する。

（１）古墳

25基を調査した。いずれも墳丘部分は削平され、大半は周溝を残すのみであったが、ＳＤ88の中央では主体部（ＳＫ202）を確認した。

古墳の形状は方墳24基、円墳１基で、規模は周溝を含めて一辺10～16ｍのものが多く、周溝は平面規模が最大のＳＤ176で幅2.8ｍ程度、深さ50㎝の断面逆台形を呈している。

以下、主な古墳について記述する。

ＳＤ88・ＳＫ202　第４次調査において南半部の溝が確認されていたが今回の調査の結果、方墳であることが判明した。

数条の撹乱溝によって一部破壊されているものの、周溝を含めて一辺がおよそ８ｍ、周溝は幅0.4ｍ、深さ８㎝である。

検出した主体部ＳＫ202は西端部分が撹乱溝によって一部壊されているが、残存している部分は長さ1.7ｍ×幅0.8ｍ、深さ28㎝である。遺物としては、刀子が出土した。

ＳＤ89　第４次調査において、ＳＤ86・87とあわせて、ひとつの方墳として確認されていた溝であり、幅2.0ｍ、深さ36㎝である。

今回の調査で掘削したところ、埋土中よりガラス管玉１点を発見した。出土した土層は埋土としては上層にあたる。

ＳＤ176　今回の調査で全体を検出したものの中では平面規模が最大の方墳である。

規模は周溝を含めて一辺18.3～18.8ｍ、周溝は幅2.5～2.8ｍ、深さ50㎝である。

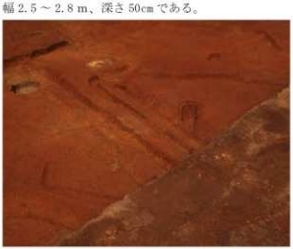

写真22　ＳＤ88，ＳＫ202（南西から）

写真23　ＳＤ176土師器鉢出土状況（南から）

この周溝の埋土には多くの石が含まれており、土層の観察から、これらの石は墳丘側から流入したものであると考えられた。墳丘に葺石が敷かれていたと見られる。遺物としては、東溝から土師器甕と土師器鉢が、西溝から須恵器杯身が出土した。

ＳＤ 177　ＳＤ 176 とならび大規模な部類に入る古墳であるが、北側は斜面へと延びている。規模は周溝を含めて一辺 18.1 m、周溝は幅 1.9 ～ 2.7 m、深さ 35 ～ 60cm である。

この周溝の南溝でほぼ中央に土橋状のたかまりが見られた。トレンチを入れ断面を観察した結果、古墳造営時に意図的に掘り残されたものと考えられた。このたかまりの中央で土師器の甕が、さらにその下から鉈（やりがんな）が出土した。

その他の遺物としては、西溝から赤彩を施された土師器甕が出土している。

ＳＤ 195　平成 24 年度からの調査を通じて、初めて埴輪が出土した古墳である。

規模は周溝を含めて一辺が 13.5 m、周溝は幅 1.2 ～ 1.9 m、深さ 30 ～ 40cm の方墳である。撹乱溝によって一部破壊されているものの、残っていた周溝の埋土から円筒埴輪と家形埴輪が出土した。出土状況から墳丘上より流入したものと考えられる。

（２）墳墓（土壙墓・木棺墓）

あわせて 16 基を確認した。以下、主なものについて記述する。

ＳＫ 152　長さ 2.3 m×幅 1.1 m、深さ 28cm の木棺墓である。南側に石が３個並べられており、棺台もしくは枕石と考えられる。遺物としては、石近くから鉄鎌が出土した。

ＳＫ 159　長さ 2.86 m×幅 0.92 m、深さ 24cm の木棺墓である。棺を固定するためとみられる粘土が検出された。遺物としては鉄鏃・刀子と小型の砥石が出土した。

ＳＫ 185　長さ 2.7 m×幅 1.4 m、深さ 26cm、最も多くの遺物が出土した木棺墓である。土層の観察等から２つの棺を南北に並べて埋葬していたことが判明した。北棺は長さ 1.8 m×幅 0.4 m、深さ 20cm で、南棺は長さ 1.9 m×幅 0.4 m、深さ 20cm である。

遺物としては、北棺側から勾玉２個と砥石が、南棺との間からも砥石と、その下から複数の鉄製品が

写真 24　ＳＤ 177 土橋状遺構、土師器甕（西から）

写真 25　ＳＤ 195 円筒埴輪出土状況（南から）

写真 26　ＳＫ 152（北から）

写真 27　ＳＫ 185 砥石・勾玉出土状況（東から）

出土した。さらに、棺の埋土をふるい掛けした際に、臼玉4点を発見した。

ＳＫ200　長さ2.0ｍ×幅1.1ｍ、深さ32cmの土壙墓である。

礫が掘形のほぼ中央、長さ1.1ｍ×幅0.5ｍの範囲に敷かれ、埋土上面からの深さは20cmとなっており、その中央部はわずかながらくぼんでいる。

（3）その他の遺構

ＳＢ180　規模としては1間×2間の掘立柱建物である。柱痕を確認したものの、遺物を伴っておらず時期は不明である。

ＳＫ182・ＳＫ186・ＳＫ192　いずれも平面形はほぼ円形で、最小のＳＫ192が直径1.18ｍ、深さ66cm、最大のＳＫ182は直径1.4ｍ、深さ98cmの土坑である。すべてに中央に直径0.2ｍ程度、深さ10～30cmほどの小さな穴の痕跡がある。遺物は伴っていないが、その形状から縄文時代の落とし穴の可能性が考えられる。

3．まとめ

今回の調査では25基の古墳を調査した。周溝から出土した須恵器・土師器類の観察から、古墳の造営は5世紀後半頃であったと考えられる。

これまでに遺跡内で確認された古墳はあわせて45基となり、数の上では石薬師東古墳群①に次ぐ、北勢地方屈指の規模となる古墳群であることが明らかとなった。古墳の一部で周溝が調査区南側へ延びるものが見られ、かつ南側には平坦な地形が広がっていることから、古墳の数はさらに増える可能性がある。

また、今回の調査の成果としては、新たに16基確認した墳墓も挙げられる。

これまでの調査では、古墳時代の墳墓は今回の調査区の南に接する第4次調査区で1基を確認したにとどまっており、遺跡北東端ならびに台地東端に位置する今回の調査区を特徴づけるものとなっている。

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡発掘調査報告』2000、同『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡（第11次・第12次）発掘調査報告』2000

写真28　ＳＫ200（西から）

写真29　ＳＫ182（北から）

写真30　調査区全景（南上空から）

写真 31　ＳＫ 185 出土砥石類

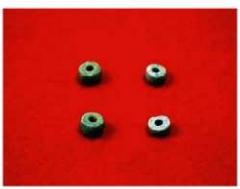

写真 32　ＳＫ 185 出土臼玉

写真 33　ＳＫ 159 出土砥石

図 10　遺構配置図 (1:1,000)

5　北山Ａ遺跡（第６次）

１．はじめに

北山Ａ遺跡は四日市市北山町に所在し、中野山遺跡の東側に隣接している。遺構の分布状況や地形の連続性などから、両遺跡は連続する古代の集落跡として捉えられる（写真34）。

平成23年度から行っている近畿自動車道名古屋神戸線の建設事業に伴う調査としては、今回の第６次調査が最終年度となる。本調査区は平成23年度に行われた仮設道建設に伴う調査と平成25年度に行われた第５次調査の調査区に隣接している。

今回の調査では南区122㎡と北区634㎡の合計756㎡を対象としたが、遺存した遺構はまばらで、新規には竪穴住居１基と大型土坑１基および小土坑４基（図12）を検出したにとどまる。

２．遺構

ＳＨ401　削平が著しいために全形は確認できなかったが、東壁の一部とカマドの焼成面および２基の主柱穴が確認できたので竪穴住居とした。ＳＫ402の北西にある深さ10cmほどの段差について、ＳＨ401の一部であることを検討したが、東壁と向きが対応しなかった。南北長については、主柱穴の位置から3.3ｍ以上であると推測できた。建物の方位は、Ｎ87°Ｗである。なお、時代を推定できる遺物は出土していないが、他の遺構と同様に飛鳥・奈良時代の遺構と考えてよいだろう。

ＳＨ302　第５次調査で発見された竪穴住居である。今回の調査では、わずかに残った壁周溝により住居の北東隅から東辺の壁が確認できた。平面形は方形ないし長方形を呈し、東西長は5.7ｍである。南北長は南側が削平されていたために不明だが、約1.5ｍ残存した。北面中央でカマドを、北東隅で貯蔵穴を検出した。また、主柱穴と思われる小穴を１基検出した。床面から土師器甕の口縁部（図11・２）と砥石（図11・５、写真36、図11・６）が出土した。

写真34　北山Ａ遺跡遠景（上空東から）

さらに竪穴床面中央で焼土粒が混じる範囲を長径約1.5mの楕円状に検出し、土坑と考えて掘削したが、なだらかに落ち込み、深さも約3～20cmと均一ではなかった。したがって、これは土坑ではなくSH302の築造時に焼土粒の混じった土で整地したものと考えた。土器はその際に整地土に混じりこんだものだと思われる土師器口縁部（図11・1）が出土している。

SK402　SH302とSH401を切る大型土坑である。平面形は不整長方形で、残存深は20～40cmである。底面は平底を呈する。当初、竪穴住居である可能性を考えて掘削を進めたが、北西隅は浅くなだらかに中心に向かって落ち、SK402の床面とは段違いになった。したがって、北西隅は自然地形による落ち込みであると判断した。埋土の上部から須恵器杯の蓋（図11・3）と身（図11・4）が出土した。なお埋土の下部や床面から遺物は見つからなかった。

SB343　第5次調査で確認された掘立柱建物である。今回の調査で新たに3基の柱穴を検出した。3間×2間の側柱建物で、東西が棟方向と推定される。規模は桁行5.1m、梁行4.2mである。梁行の柱間は2.1m等間で、桁行は西の柱間が1.5mで中央と東の柱間は1.8mである。棟方向はN55°Wである。建物の中央で小穴を検出したが、棟の柱筋上にあることから、棟持柱であった可能性も考えられる。SB343の北側に、棟方向の方位がそろう掘立柱建物SB344が第5次調査で確認されている。規模がほぼ同じである3間×2間の掘立柱建物であることからも、2つの遺構には何らかの関係性があると思われる。

写真35　SH401・SH302・SK402（北東から）

3．遺物

出土した遺物は少なく小片であるが、土器1や土器2、土器4は口縁部が残っていたことから、時期を推測できた。おおよそ7世紀のものと考えられる。その他の出土遺物もその時代を覆すようなものではなかった。土器1・2はいずれも土師器甕と思われる。土器1は口縁部がゆるやかに外反し、口縁部から口縁端部が直線的に立ち上がる。土器2は口縁部が強く屈曲する。

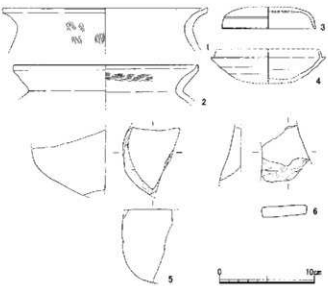

図11　遺物実測図（1：4）

4．まとめ

今回の調査では、先行する調査と同様に飛鳥・奈良時代の遺構を確認した。SH302やSH401より北では遺構が確認できなかった。また調査区の北西は谷筋に向かっている。以上の点から、今回の調査区は集落の北端にあたると考えられる。

写真36　SH302出土の砥石

図 12　遺構平面図（1：300）

6　中野山遺跡（第 13 次）

1．はじめに

中野山遺跡は、本年度の発掘調査で対象総面積の100％を終えた。最終調査である第 13 次は、遺跡西部の 6,173 ㎡を対象とした（図 4）。調査の結果、縄文時代から中世の遺構を検出した。

2．遺構と遺物

（1）縄文時代

後期初頭の袋状土坑 1 基と小土坑 5 基、縄文土器片を伴うピットを僅かに検出した。袋状土坑は、隣接する過年度調査区（第 9 次・第 12 次）のものを合わせると 7 基を検出したことになる。中野山遺跡で希少な遺構である。

ＳＫ 1827（写真 37）　調査区東部で検出した袋状土坑である。土坑東側上部をＳＨ 1674 に切られている。西側上部は削平されて本来の深さは不明である。残存部の径は 0.9 m、深さは 0.36 m を測る。

写真 37　ＳＫ 1827（東から）

写真 38　ＳＫ 1838（南から）

写真 39　調査区全景（南西から）

床面から約0.15 m上で最大径1.05 mとなり、上部にいくにつれてすぼまる。埋土中層で後期初頭と推定される縄文土器片（図14－1・2）を検出した。土坑底部に被熱跡はみられない。

ＳＫ1838（写真38）　調査区東部で検出した小土坑である。上部は削平されて本来の深さは不明である。残存部の径は0.8 m、深さは0.28 mを測る。埋土上層から中層にかけて後期初頭と推定される縄文土器口縁部片（図14－3・4・5）や凹石を検出した。

（２）古墳時代後期から飛鳥時代

竪穴住居15棟と掘立柱建物16棟、大型土坑7基、小土坑を確認した（表3・4）。竪穴住居の平面形は、方形もしくは長方形を呈する。掘立柱建物は総柱建物と側柱建物の双方が認められた。いずれも柱穴は小型であった。

ＳＨ1820（写真40）　調査区北東部で検出した竪穴住居である。東西4.5 m、南北4.25 mの方形を呈し南壁中央にカマドをもつ。径約45cmの主柱穴を4基と南東隅に貯蔵穴を検出した。南東部には貼床が認められる。カマド掛口下から土師器甑1個体を、横倒し状態で検出した（写真41）。また、床面直上から須恵器甕片や砥石（長さ25.5cm）、東側の土坑から径13cmの須恵器杯身（1／3残存）と径14cmの須恵器杯蓋（1／3残存）を検出した。

ＳＢ1812（写真42）　調査区北部で検出した掘立柱建物である。東西4.65 m、南北4.65 mを測り、桁行3間、梁行3間の総柱建物である。柱掘方は一辺約40cmの隅丸方形を呈し、約16cmの柱痕跡が認められた。2穴の重複が見られるものもある。柱間寸法は桁間、梁間ともに5尺＋5.5尺＋5尺を測る。遺物は出土していない。

ＳＢ1817（写真43）　調査区東部で検出した掘立柱建物である。東西5.1 m、南北3.6 mを測り、桁行3間、梁行2間の側柱建物である。西編67°の東西棟でＳＢ1812と方向を同じにする。柱掘方から土師器片を検出した。土師器片は、周辺の竪穴住居から出土する遺物と同時期のものと推定される。

ＳＫ1811（写真44）　調査区北部で検出した大型土坑である。上部は削平されて本来の深さは不明である。平面形はいびつな楕円形を呈し、長径5 m、短

写真40　ＳＨ1820（北東から）

写真41　ＳＨ1820出土土師器甑（南から）

写真42　ＳＢ1812（南西から）

写真43　ＳＢ1817（南東から）

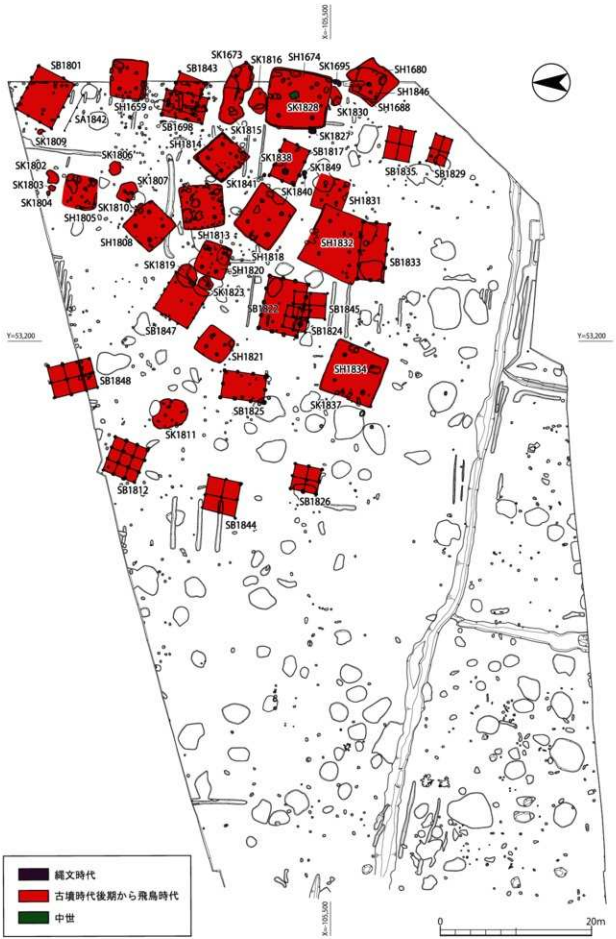

図 13　遺構平面図（1：500）

径3.9 m、深さ0.16 mを測り床面は平坦である。過年度調査区に見られる大型土坑と同様に、簡易な屋根が付けられた穴倉の可能性がある。床面から土師器片や須恵器片を多数検出した。須恵器杯身（写真47上）は大型で口縁部の立ち上がりが高く、内傾の度合が低い。

（3）中世

土坑1基を検出した。中野山遺跡全体において中世の遺構は寡少で、散在している。

ＳＫ1828（写真45） 調査区東部で検出した土坑である。ＳＨ1674を切り、上部は削平されて本来の深さは不明である。平面形はいびつな四角形を呈し残存部は南北1.2 m、東西0.9 m、深さ0.15 mを測る。床面や壁面の一部に被熱跡が認められる。中世の遺物は検出されず、ＳＨ1674のものと思われる土師器片や須恵器片が混入していた。土坑の形状や被熱の様子から中世墓と推定される。

写真44　ＳＫ1811（南から）

写真45　ＳＫ1828（南東から）

3．まとめ

（1）縄文時代

中野山遺跡の発掘調査を終え、遺構の分布状況が

遺構名	平面形	規模	主柱穴	カマド	貯蔵穴	方位
SH1659	方形	5.2×4.8	2.25×2.1	北	北東隅	N4° E
SH1674	方形	8.0×8.0	4.5×4.5	北	南辺	N5° E
SH1680	方形	5.5×5	不明	不明	不明	N41° W
SH1688	方形	4×3.75	南北1.5	北	南東隅	N22° E
SH1805	矩形	4.5以上×4.5以上	2.4×1.8	不明	北東隅	N16° E
SH1808	方形	5.25×5.25	2.65×2.65	西	不明	N44° W
SH1813	方形	5.8×5.8	3.0×2.7	東	南東隅	N5° W
SH1814	方形	5.25×5.0	2.7×2.4	西	南西隅	N46° E
SH1818	長方形	7.0×6.0	3.3×3.0	西	東辺	N35° E
SH1820	方形	4.5×4.25	2.55×2.1	南	南東隅	N20° E
SH1821	方形	4.35×4.0	1.8×1.8	中央炉	南東隅	N54° W
SH1831	矩形	4.55以上×4.65以上	1.95×1.95	南	南東隅	N16° E
SH1832	方形	8.5×7.7	4.65×4.35	北	不明	N22° E
SH1834	方形	7.4×7.2	4.2×3.6	西	西辺	N68° W
SH1846	矩形	3.5×2.1以上	不明	不明	不明	N22° E

表3　古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居一覧（単位はm）

遺構名	種別	規模	桁行間数(柱間寸法)×梁行間数(柱間寸法)	方位
SB1698	側柱	5.55 × 3.45	3(1.95+1.65+1.95)× 2(1.95+1.5)	N13° E
SB1801	側柱	6.45×5.4	4(1.8+1.5+1.5+1.65)×3(1.8+1.8+1.8)	N62° W
SB1812	総柱	4.65×4.65	3(1.5+1.65+1.5)×3(1.65+1.5+1.5)	N67° W
SB1817	側柱	5.1×3.6	3(1.5+2.1+1.5)×2(1.8+1.8)	N67° W
SB1822	側柱	7.2×5.25	4(1.8+1.8+1.8+1.8)×3(1.8+1.65+1.8)	N78° W
SB1824	総柱	3.0×3.0	2(1.5+1.5)×2(1.5+1.5)	N76° W
SB1825	側柱	5.7×3.6	3(1.8+2.1+1.8)×2(1.8+1.8)	N7° E
SB1826	総柱	3.6×3.3	2(1.8+1.8)×2(1.65+1.65)	N12° E
SB1829	総柱	3.6 ×2.4	2(1.8+1.8) ×2(1.2+1.2)	N72° W
SB1833	側柱	7.65 ×3.6	4(1.8+1.8+1.95+2.1) ×2(1.8+1.8)	N83° W
SB1835	総柱	4.2× 3.6	2(2.1+2.1) ×2(1.8+1.8)	N77° W
SB1843	側柱	4.5×3.6	3(1.5+1.5+1.5)×2(1.8+1.8)	N68° W
SB1844	総柱	4.2×4.5	2(2.1+2.1)×2(2.4+2.1)	N8° E
SB1845	総柱	4.2× 3.3	2(2.1+2.1)×2(1.65+1.65)	N4° E
SB1847	側柱	5.7以上×5.1	3以上×4(不等間)	N39° W
SB1848	総柱	5.7×4.2	3(2.1+2.1+1.5)×2(2.1+2.1)	N14° W

表4　古墳時代後期から飛鳥時代の掘立柱建物一覧（単位はm）

明らかになった。台地北辺にあたる遺跡東部には、早期や中期の竪穴住居、早期の煙道付炉穴や集石炉、晩期の土器棺墓がみられる。遺跡中央部から西部にかけて、中期から後期初頭の小土坑や袋状土坑が散在していることがわかった。前期の遺構は未確認だが、約7,000年にもわたり台地を利用していた人々の生活の一端を知ることができた。

（2）古墳時代後期から飛鳥時代

第13次調査の竪穴住居や掘立柱建物は、調査区の東部に集中していて西部にはみられない。これらの遺構は、東に隣接する過年度調査区（第12次）で確認している建物群と同時期のまとまりであると想定でき、中野山遺跡西端の集落と考えられる。

掘立柱建物や竪穴住居のなかには方向を同じにし、北辺や南辺、または東辺や西辺を揃えるもの（ＳＨ1820・ＳＨ1832・ＳＨ1834・ＳＢ1812・ＳＢ1817のグループやＳＢ1698・ＳＢ1822・ＳＢ1835のグループ）があり、同時期に計画的に建てられたことが想定される。

中野山遺跡全体で200棟をこえる古代の建物を確認したことになり、北勢地方では最大級の集落遺跡であることが明らかになった。今後も集落について詳細に検討していく必要がある。

写真46　石鏃（上）**切目石錘**（下）

写真47　須恵器杯・蓋　ＳＫ1811出土（上）
ＳＨ1813出土（下）

写真48　須恵器甕（ＳＨ1813出土）

図14　出土土器実測図（1：3）

7　北山城跡・居林遺跡（第４次）

１．はじめに

北山城は、朝明川左岸台地西端に位置する城館で、中～近世の文献や資料には北山城に関する記載はない。しかし、近江から桑名を結ぶ近世八風街道沿線の丘陵や台地上には、市場城や源治山城、萱生城といった、中世後期に位置づけられている城館が点在[1]しており、北山城もそれらとともに、一連の城館と考えることができる。また、市場城の縄張りと類似することも、それを裏付けると言えよう[2]。

これまで平成23年度から、３次にわたる調査が行われており、今年度が第４次調査となる。平成24・25年度の第２・３次調査では、台地上平坦面および西側斜面裾部を中心に、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の竪穴住居59棟を確認している。また西側斜面裾部では、奈良時代の掘立柱建物、平安時代の土坑、斜面中腹部では居林古墳群に関連すると思われる古墳の周壕状の溝が確認されている[3]。

今年度の第４次調査区は、第２次調査区の北側および第３次調査区の東側にあたる台地上平坦面の6,948㎡を対象として掘削し、弥生時代後期の竪穴住居14棟、古墳時代前期初頭の竪穴住居53棟、掘立柱建物２棟、古代の土坑１基などを確認した。これにより、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴住居の合計棟数は126棟になり、四日市市山奥遺跡[4]や同市久留倍遺跡[5]に比肩する集落規模であることが明らかとなった。その他、古代の土坑や城館にともなう可能性のある溝２条を、確認した。

また、今年度調査により、城館よりも古い時期の集落遺構（主に古墳前期初頭）が城館下層に展開することが明確となったため、城館範囲下層およびこれまでの第２・３次調査で確認した集落遺跡を北山城跡とは異なる性格をもつ「居林遺跡」として新規登録を行った。　（宮原）

写真49　調査区全景（東から）

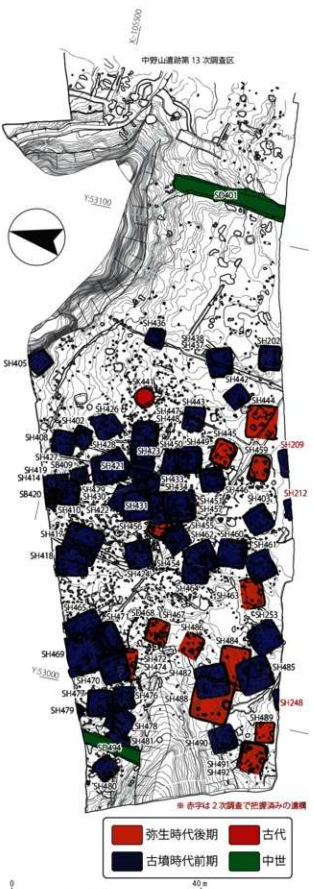

図15　調査区平面図（1：800）

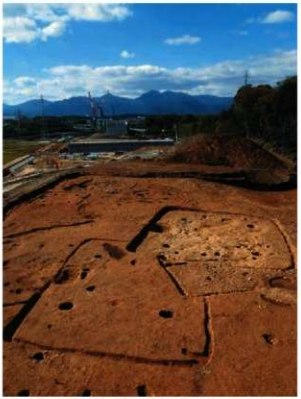

写真50　ＳＨ 482・484・488 周辺（東から）

写真51　ＳＨ 402 以西の竪穴住居群（東から）

写真52　ＳＨ 465・469・470 周辺竪穴住居群（南から）

2．遺構

（1）弥生時代後期の遺構

竪穴住居（表5、写真50・53－56）　計14棟を確認した。調査区西側、特に南西側に集中する。いずれも隅のやや円い方形プランで、ＳＨ463やＳＨ484のように、一辺が長い方形プランもみられる。その他の住居も、全般的に一辺の長い方形を志向し、長軸÷短軸の数値が1.1を超えるものが、規模の確定した[6]13棟中11棟ある。後述する古墳時代前期初頭の住居（表6）と比較するとその偏りは明瞭である。

規模はＳＨ484やＳＨ488（写真50）で、一辺が9ｍを超える住居がみられた。一辺が9ｍを超える住居は、朝明川流域弥生時代後期竪穴住居の平均規模が約6.2ｍ（山奥遺跡、西ヶ広遺跡、城ノ谷遺跡、辻子遺跡、金塚遺跡、北山城跡から一辺の全長が計測可能な146棟から算出した平均値）であることから、大型住居に該当すると言える。これまで朝明川流域では、山奥遺跡のＳＨ178（9.8×8.8ｍ）[7]および西ヶ広遺跡のＳＨ206（9.0×8.7ｍ）、ＳＨ211（10.0×9.9ｍ）[8]、中野山遺跡のＳＨ1646（9.2×7.9ｍ）[9]の4棟が一辺9ｍを超える住居として

遺構名	規模		長軸/短軸	貯蔵穴の位置
	長軸	短軸		
ＳＨ444	7.2	6.7	1.07	南辺中央
SH445	5.7	5.1	1.13	南辺中央
SH454	(5.2)	4.9	－	南辺中央
SH459	5.4	4.4	1.21	南辺中央
SH463	6.5	4.4	1.47	南辺中央
SH467	5.4	4.9	1.09	南辺中央
SH472	6.8	5.6	1.20	南辺中央
SH474	6.1	5.4	1.14	南辺中央
SH484	9.3	6.4	1.45	南辺中央
SH486	(4.7)	(3.5)	－	南辺中央
SH488	9.5	8.5	1.12	南辺中央
SH489	4.6	4.1	1.12	南辺中央
SH491	6.3	5.8	1.10	南辺中央
SH492	6.1	5.0	1.23	南辺中央

※（　）内は残存状況で計測した数値

表5　弥生時代後期の竪穴住居一覧

写真53　ＳＨ445（北東から）

写真54　ＳＨ459（北から）

写真55　ＳＨ463（北から）

写真56　ＳＨ445主柱穴遺物出土状況（南から）

確認されており、今後、集落内の大型住居とその他の住居における性格の差異などの解明が求められる。

住居に付属する施設は、４本の主柱穴を有する点は古墳時代前期初頭と通じるが、南辺の中央に貯蔵穴を有する点や、間仕切溝、貼床構造を有さない点は大きく異なる。また古墳時代前期に比して、地床炉を有するものは少なく、こうした古墳時代前期初頭のものとの差異が、居林遺跡のみに該当するものかどうか、今後、検討が必要であろう。

その他の遺構　多数のピットを確認したが、掘立柱建物や柵列を構成するものはなかった。

（２）弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の遺構

竪穴住居（表６、写真51・52・57～60）　計53棟を確認した。弥生時代後期同様に斜面側の調査区西側、特に中央から北側に集中する。北側の事業地外、北山城跡の下層でも多数の竪穴住居が存在しているものと思われる。集中する箇所では、10棟前後の切り合いがみられた（写真51・52）。いずれも方形プランで、長軸÷短軸の数値が1.1を超えるものは、規模の確定した30棟中４棟のみで、1.2を超えるような明確に一辺が長い方形プランはみられなかった。

規模は最小で一辺3.3ｍ、最大で一辺8.4ｍである。住居に付属する施設は、４本の主柱穴を有し、中には柱痕が明確なものもある（写真60）。貯蔵穴は、ほぼ南辺の西側に設けられている。また、南辺中央に間仕切溝を設けるものや壁柱穴を有するもの（写真59）もみられ、弥生時代後期とは異なる様相を示す。

掘立柱建物　調査区の北側で側柱建物１棟と総柱建物１棟を確認した。

ＳＢ409（写真61）　柱間が２間×４間の不整形の側柱建物で、規模は4.0×4.3ｍである。棟側の柱間間隔は狭く、0.6～1.1ｍ、梁側の柱間は1.3～2.0ｍとどちらも不均一である。柱穴の規模は、0.3～0.5ｍである。独立棟持柱建物とも考えられるが、棟持柱に該当する柱穴は、他よりも浅く、平面も不整形である。ただ、この棟持柱状の柱が無い場合、梁間が3.6ｍとなり建物の構造が不安定となる。そのため、２列の柱列の可能性もある。時期を古墳時

写真57　ＳＨ402・408・428（南東から）

写真58　ＳＨ449・450（南から）

写真59　ＳＨ462・464（南から）

写真60　ＳＨ449　主柱穴土層（南から）

代前期初頭とする理由は、柱穴から多数の当該期の土器が出土していることと、切り合い関係から古墳時代前期初頭のＳＨ410に先行するための２点である。

ＳＢ420（写真62）　２間×２間以上の総柱建物で、規模は4.6×4.4ｍ以上である。柱間間隔はいずれも約2.0ｍでほぼ一致する。柱穴の規模は0.6～0.7ｍとＳＢ409に比べて大型で、深さもほぼ均一である。

遺構名	規模		長軸/短軸	貯蔵穴の位置
	長軸	短軸		
SH402	3.5	3.3	1.07	北東
SH403	5.6	5.4	1.03	南西
SH408	4.9	4.8	1.03	南西
SH417	6.6	6.6	1.00	南西
SH418	8.1	8.1	1.00	南西
SH421	6.3	6.3	1.01	南西
SH423	5.1	5.1	1.00	南西
SH424	5.8	5.5	1.05	南西
SH426	5.3	5.3	1.00	—
SH427	7.3	6.3	1.16	南西
SH431	6.3	6.3	1.01	南西
SH433	5.1	4.8	1.06	南西
SH434	5.6	4.9	1.13	南西
SH436	4.1	3.9	1.06	南西
SH437	6.1	5.2	1.17	南西
SH438	5.5	5.2	1.07	—
SH442	4.6	4.4	1.05	—
SH446	5.1	5.0	1.02	—
SH449	5.9	5.6	1.05	南西
SH450	5.5	5.3	1.03	南西
SH451	7.2	6.9	1.04	南西
SH457	6.2	5.5	1.12	南西
SH460	5.8	5.4	1.07	南西
SH461	6.0	5.7	1.05	南西
SH462	6.3	6.3	1.01	南西
SH464	5.5	5.1	1.07	南西
SH470	6.3	6.0	1.05	南西
SH477	5.7	5.6	1.01	南西
SH482	6.8	6.7	1.01	南西

※全竪穴住居53棟中の規模が確定できた29棟を抜粋して掲載

表６　古墳時代前期初頭の竪穴住居一覧（抜粋）

柱穴から古墳時代前期初頭の土器が出土しており当該期に位置づけている。ただ、切り合い関係では古墳前期初頭のＳＨ410に後出するため、その際に混入した可能性もあり、時期は不確定である。

（３）古代以降の遺構

古代の遺構は、台地奥部で隣接する中野山遺跡と比較すると少なく、調査区中央東寄りで、奈良時代の須恵器や土師器の出土した土坑ＳＫ441を１基確認したのみである。過去の調査では、西側斜面裾部で、平安時代の土坑や飛鳥～奈良時代の掘立柱建物が確認されている。

その他、城と関連する時期の遺構の可能性があるものとして、ＳＤ401（中野山９次ＳＤ11301と同一の溝）とＳＤ494が挙げられる。両溝は、尺間法の１町に近い数字である約110ｍの間隔で、並走する可能性があり、郭間を区切る堀状の性格が考えられる。ただし、どちらの溝からも出土遺物は皆無のため、時期は断定できない。　（宮原）

写真61　ＳＢ409（南から）

写真62　ＳＢ420（南から）

3．遺物

今回の調査では、コンテナバット121箱分の遺物が出土した。

土器の時期は、弥生時代後期～古墳時代前期初頭である（写真63）。第2次調査と同様に、竪穴住居の廃絶後に堆積したと考えられる土器群が多いため、山中式併行期に機能した住居の埋土上層に、廂間式併行期[9]の遺物が含まれることがある。器種は甕・壺・高杯などが主体で、ほとんどが在地産である。複数個体出土した手焙り形土器のなかには、近江地域からの搬入品と考えられる個体がみられる。

石器は、柱状片刃石斧・砥石・石皿・台石が出土した。SH 467から出土した柱状片刃石斧の大きさは長さ5.1cm・幅1.1cmで、共伴した土器から時期は弥生時代後期と考えられる。砥石は小型のものである（写真64）。

金属製品は、古墳時代前期の竪穴住居SH 421から鉄製の直刃鎌が出土した。（相場）

写真63　出土土器

写真64　出土石器

4．まとめ

これまでの4次にわたる調査で、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴住居、合計126棟を確認した。内訳は、弥生時代後期が58棟、古墳時代前期初頭が68棟である。

集落の変遷をみると、居林遺跡の集落分布域より東に約150 mの空白地を経て、弥生時代中期末葉～後期の竪穴住居が中野山遺跡（第12次）で9棟確認されており、まず台地奥部より集落の形成がはじまったと考えられる。その後、台地先端部へ移行し、弥生時代後期でも新しい段階には、西側の緩斜面にも竪穴住居が確認されている。そして古墳時代前期初頭には、斜面から住居がなくなり、再び台地平坦面が主体の集落構成となるようである。弥生時代中期末葉～古墳時代前期初頭にかけて、このように集落立地が変遷をたどる背景には、朝明川流域における何らかの事象が関与しているものと考えられ、今後、より詳細に当該期の集落推移を整理する必要があろう。（宮原）

［註］

① 伊藤徳也『再発見・北伊勢国の城』2008

② 高田徹「織豊期における北勢四郡の城館」『中世城郭研究』8号　中世城郭研究会 1994

③ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ー亀山西 JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅲ・Ⅳ　2013・2014

④ 四日市市教育委員会『山奥遺跡』Ⅰ・Ⅱ　四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書31・32　2003・2004

⑤ 四日市市教育委員会『久留倍遺跡』5・6　四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書46・47　2013・2014

⑥ 長軸および短軸、両側の住居壁および周壁溝が残存しているもの。

⑦ 前掲④のⅡ。

⑧ 四日市市教育委員会『西ヶ広遺跡発掘調査報告−D地区−』四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書6 1972
三重県教育委員会「西ヶ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970

⑨ 前掲③のⅣ。

⑩ 前掲③のⅢ。

⑪ 財団法人愛知県埋蔵文化財センター『堀間遺跡』1990

8　小牧南遺跡（一次）

1．はじめに

当遺跡は四日市市小牧町に所在し、朝明川南岸の台地斜面に位置する集落遺跡である。平成25年度の調査では縄文時代と古墳時代の集落跡が確認されている。

今回の調査区は遺跡全体の北東隅にあたる。

現在は宅地となっているが、かつては谷地形であり、南側に隣接する区域で行った平成24年度の一次調査で地形の大きな落ち込みが確認されている。

2．調査の概要と結果

3本の調査坑（T4～6，計165㎡）を設定し調査を行った。

現地表からの深度30㎝～60㎝で明褐色シルトを主体とした地山面に達し、この上面で住宅建設に伴う現代の撹乱溝と木根痕・風倒木痕を検出した。

またT4・T5の西側およびT6の南西側では谷状の落ち込みがみられ、現地表からの深度は確認できる最深の箇所で2.8mに達した。

いずれの調査坑からも遺構・遺物は確認されなかったため、当調査区の範囲については二次調査の対象外とした。

写真65　T5全景（東から）

図16　調査坑配置図（1:2,000）

9　椋ノ木遺跡（一次）

1．はじめに

椋ノ木遺跡は、海蔵川右岸の扇状地に立地し、三重郡菰野町池底と潤田に所在する。陶磁器類が採集されており、中世から近世の包蔵地として、菰野町遺跡番号135として登録されている。なお、池底の地名の由来となった池が周辺に点在していたが、昭和39年の圃場整備事業によって全てなくなっている。

2．調査の概要と結果

今年度は、6月に路線内の北側ほぼ中央で、3月にその南隣で一次調査を行った。6月の調査では、幅2mの調査坑を4本（T1～T4：延長87m）設定して遺構・遺物の有無についての調査を行った。遺物は、T2から須恵器小片・山茶椀小片が出土したが、大半は近現代の陶器片である。また、各調査坑で、攪乱と近現代の溝（落ち込み？）を確認したにとどまり、明確な遺構は確認されなかった。

3月の調査では、幅2mの調査坑を4本（T5～T8：延長93m）設定して調査を行った。調査の結果、T5とT6では、広範囲に造成土が入っていることを確認し、T7とT8では、近現代の耕作に伴う攪乱を認めたにとどまった。いずれの調査坑からも、遺構・遺物は確認されなかった。

今年度の2回にわたる一次調査により、事業地内の14,000㎡すべての調査が終了した。

写真66　T3（東から）

写真67　T8（南西から）

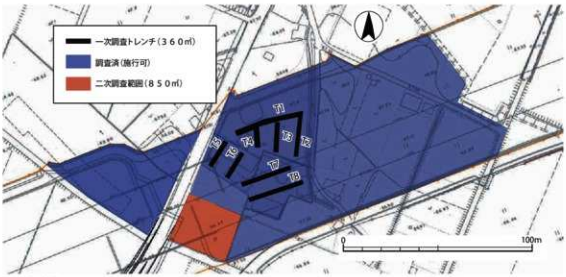

図17　調査坑位置図（1：2,000）

10　椋ノ木遺跡（第２次）

１．はじめに

椋ノ木遺跡は、三重郡菰野町池底と潤田に所在し、海蔵川右岸、鈴鹿山地から広がる扇状地に立地する。今回は、平成25年度の一次調査結果をもとに850㎡を対象として調査を行った。

２．遺構と遺物

７世紀中頃の竪穴住居５棟（ＳＨ１、ＳＨ10、ＳＨ12、ＳＨ16、ＳＨ19）及び土坑１基（ＳＫ22と、江戸時代以降の溝（ＳＤ４など）を複数検出した。調査区北側約100㎡はコンクリートなどが入り、広範囲に攪乱されていた。

（１）竪穴住居

ＳＨ１は一辺約５ｍの方形をなし、南辺東端にカマドを持つ。煙道は、一部がＳＤ４によって切られていた。北辺のほぼ中央部で北東方向へ延びる突出部があり、初めはこれが煙道と思われた。しかし、土師器長胴甕の体部片が比較的まとまって出土したものの、焼土などカマドの痕跡はなかった。また、カマドの東で貯蔵穴を、床面では焼土面を確認した。

ＳＨ10は一辺約５ｍの方形をなし、西辺にカマド及び煙道を持つ。床面では硬化面を確認した。

ＳＨ12は一辺約4.5ｍの方形をなし、西辺にカマドを持つ。床面で硬化面を確認した。

ＳＨ16は一辺約４ｍの方形をなし、東辺にカマドを持つ。しかし遺構の南端から北東部にかけて、一次調査と重なっており、またＳＨ10と重複しており、残存状況はよくない。

ＳＨ19は一辺約４ｍの方形をなし、東辺にカマドを持つ。このカマドからは２つの煙道が延びていた。また、カマドの南東で貯蔵穴を確認した。ここからは、須恵器杯蓋、杯身などの土器が出土した。

これら竪穴住居のカマドの位置は特定の方向に揃っていない。またＳＨ10・ＳＨ16・ＳＨ19の３棟は、どれも隣り合う竪穴住居と重複している。

（２）その他の遺構

ＳＫ22は調査区の南東部で検出した。ＳＤ４及びその他いくつかの耕作溝に切られており、全体の形がとらえにくい。出土遺物から、５棟の竪穴住居と同じ時代の遺構と考えられる。

（３）遺物及び下層調査

飛鳥時代の遺物が出土した。ただし、ＳＨ19の埋土中から弥生時代中期の壺頸部と甕口縁部が出土したことから、下層遺構の存在の可能性を考え、２本の調査坑を設けて下層を調査した。しかし、遺構や更なる遺物の確認はなかった。

３．まとめ

今回の調査で、これまで中世以降の遺跡であると考えられてきた椋ノ木遺跡に、飛鳥時代の集落跡があることが判明した。しかし、今回の調査区だけに竪穴住居があったとは考えにくい。

弥生時代中期の土器が出土したことから、近辺での弥生時代の遺跡の存在も予想される。

写真68　調査区全景（東上空から）

写真69　ＳＨ１（北から）

写真70　ＳＨ 19（西から）

写真71　ＳＨ 10 カマド（東から）

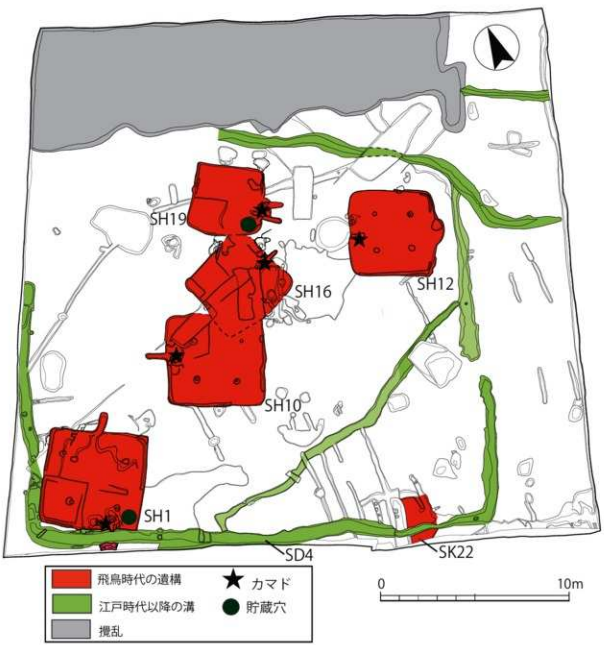

図 18　遺構配置図（1：200）

11　高ノ瀬遺跡（一次）

1．はじめに

高ノ瀬遺跡は鈴鹿市山本町字高ノ瀬に所在し、扇状地の扇端、標高 159 ～ 162 mに位置する。現況は畑地および宅地である。

平成 22 年度の分布調査では、灰釉陶器片や山茶椀片が広範囲にわたり発見されている。これを受けて行われた平成 24 年度の調査では、調査坑のひとつから土師器甕の底部が出土したものの、遺構は発見されていない。

2．調査の概要と結果

8 本の調査坑（T 22 ～ 29，計 715 ㎡）を設定し調査を行った。表土および黒色土の下、深度 40 ～ 100cm で粘質土の層に達した。この上面で撹乱穴を複数検出したものの、遺構は検出されなかった。その下は粘質土と砂利とが互層をなしていたが、いずれの層でも遺構は検出されず、安定した遺構検出面は見られなかった。

また、遺物としてT 24 から土師器・灰釉陶器の小片が、またT 29 からも土師器の小片が少数出土したが、いずれも撹乱穴からのものである。

さらに新名神高速道路建設に伴う集落排水管移設工事に伴い、延長 54 m、幅 1 mで工事立会いを行った。遺構・遺物は確認されなかった。

以上の調査結果から対象範囲の二次調査については必要がないものと判断した。

写真 72　T 25 全景（北から）

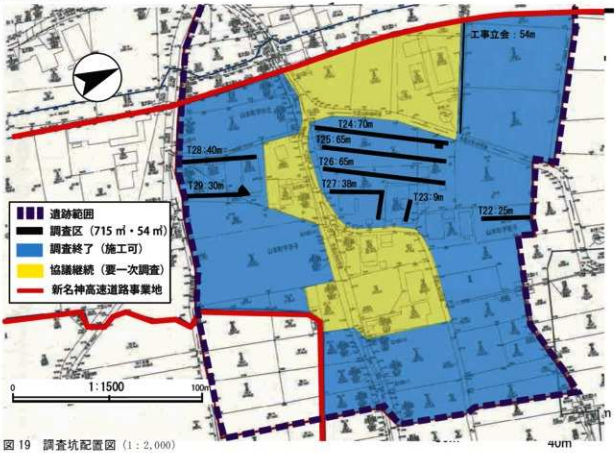

図 19　調査坑配置図（1：2,000）

12　小社遺跡（第３次）

１．はじめに

小社遺跡は鈴鹿市西部、鈴鹿山地の麓に所在し、鈴川北岸の扇状地上に立地する。鈴川の南側には、鎌倉時代を中心とした集落の釜垣内遺跡がある。また、西方には椿大神社がある。周辺には、東荒野遺跡や神戸遺跡、井領田遺跡など中世の遺物散布地が存在する。調査は、平成24・25年度に行われ、2,520㎡が終了した。今年度は、Ａ地区（南区）・Ｂ地区（北区）を設けて2,073㎡の調査を行った。

２．調査の概要と結果

当遺跡は、標高153～155ｍの北西から南東に向かって傾斜する扇状地に立地し、現況は畑地である。遺構検出面はにぶい黄橙砂質土と褐色土の混在～灰褐粘質土層を主体とする地山であり、遺構検出面までの掘削深度は0.2～0.6ｍである。

（１）Ａ地区

Ａ地区では、近世以降と考えられる石列や石組みの土坑・溝等を検出し、土坑を６基、溝を３条確認した。土坑のうち小さなものは、長径0.4ｍ、短径0.3ｍの円形土坑、大きいものは、長径2.3ｍ、短径2.0ｍ規模である。その他、近世の田畑の石垣と思われる石列を伴う溝３条（ＳＤ32・37、ＳＺ36）を確認した（写真75）。

３条の溝は、石列が外側に向かって揃えて配置されていることを確認した（写真75）。遺物は、中世後期から近世にかけての土師器片（皿・羽釜・茶釜等）や陶器片（天目茶椀・椀・皿・擂鉢等）が多数出土した他、五輪塔（火輪）・石臼を確認したが、建物は確認することが出来なかった。

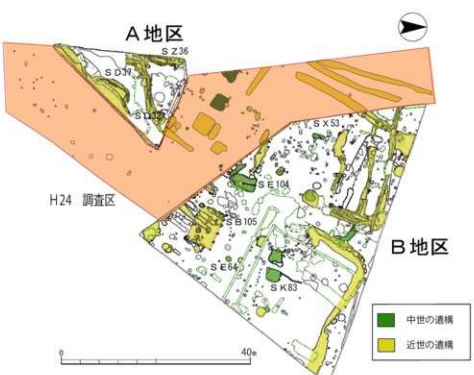

図20　遺構平面図（1：800）

（２）Ｂ地区

Ｂ地区では、中世後期と考えられる墓１基（ＳＸ53）、井戸１基（ＳＥ64）、近世の井戸（ＳＥ104）、土坑、柱穴等を確認した。遺物は、土師器（皿・羽釜・茶釜・焙烙）、瀬戸美濃産陶器（椀・皿・擂鉢）、常滑産陶器（甕・鉢）、青磁椀等の土器等が出土した。検出した土坑は、小さなものは、長辺0.4ｍ、短辺0.38ｍの方形土坑で、大きいものでは、長辺4.0ｍ、短辺3.6ｍで、石列を伴うもの（ＳＫ83）を確認した(写真77)。ここで､特筆すべきは､中世の土壙墓(ＳＸ53）の検出である。この土壙墓は、南北に2.5ｍ、東西に0.9ｍの隅丸方形で、土師器皿・小皿や、天目茶椀片が出土した（写真76)。

掘立柱建物は、側柱建物１棟（ＳＢ105）を確認した。建物の大きさは、東西が４間、南北が２間である。出土した遺物から、近世と思われる。

井戸は、２基確認した。ＳＥ104は、径1.2ｍの円形で、時期としては、出土した遺物から、近世であると思われる。ＳＥ64は､1.4ｍ×1.2ｍの方形で、埋土には礫が大量にみられた。壁面を部分的に補強した礫が崩落したものと、井戸を廃棄する際に埋められたものと考えられる。時期としては、中世の土師器皿・羽釜、常滑産陶器甕が出土していることから、中世と思われる。

３．まとめ

今回の調査では、中世～近世にかけての遺構・遺物を確認した。具体的には、中世の墓１基、井戸１基、近世と思われる側柱掘立柱建物１棟、井戸１基、石列を確認した。石列の性格としては、段々上の畑の土留めとして利用されていたと考えられる。今回の発掘調査から、この地域では中世からの生活の跡がみられ、近世以降にも生活が引き継がれていたことが確認出来た。

写真 73　Ａ地区ＳＤ32（北東から）

写真 75　Ｂ地区ＳＫ83（西から）

写真 74　Ｂ地区ＳＸ53（東から）

写真 76　調査区全景（東上空から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	きんきどうしゃどうたにがやこうつせん（よっかいちしてゐんくしょんからのみやまにしゅんくしょん）ぴんせっにまるうにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさかいはつ こ
書　　名	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	Ⅴ
編著者名	河尻浩一・服部芳人・松永公喜・浅野隆司・鈴木規之・宮崎久美・水橋公恵・中村法道・水谷豊・山中由紀子・矢田陽・高松雅文・西脇智広・相場さやか・宮原佑治・山田猛
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　　ＴＥＬ　0596-52-1732
発行年月日	西暦2015（平成27）年10月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いさかじょうあと 伊坂城跡	よっかいちしいさかちょう 四日市市伊坂町	24202	246	35°2′25″	136°37′23″	20140519 ～20150313	第６次調査 7,875 （下層319含む）	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業
				35°2′23″	136°37′26″	20140820 ～20150313	第７次調査 2,134 （下層94含む）	
きたやまし～いせき 北山Ｃ遺跡	くわなしし、も 桑名市志知	24205 a	154	35°2′57″	136°36′13″	20140418 ～20140929	第５次調査 9,047	
きたやまえ～いせき 北山Ａ遺跡	よっかいちしきたやまちょう 四日市市北山町	24202	239	35°2′54″	136°35′24″	20140623 ～20140806	第６次調査 756	
なかのやまいせき 中野山遺跡	よっかいちしきたやまちょう 四日市市北山町	24202	238	35°2′51″	136°35′2″	20140418 ～20141125	第13次調査 6,173	
きたやまじょうあと 北山城跡 いはやしいせき 岩林遺跡	よっかいちしきたやまちょう 四日市市北山町	24202 24202	237 584	35°2′50″	136°34′53″	20140418 ～20141218	第４次調査 6,948	
こまきみなみ～いせき 小牧南遺跡	よっかいちしこまきちょう 四日市市小牧町	24202	568	35°2′33″	136°34′2″	20141208 ～20141209	一次調査 165	
ねぐのきいせき 椋ノ木遺跡	こもりちょういけぞこ 孤野町池底	24341	135	35°1′53″	136°31′9″	20140618 ～20140619	一次調査 174	
						20150310 ～20150311	一次調査 186	
				35°1′51″	136°31′7″	20141016 ～20150113	第２次調査 791	
たかのせいせき 高ノ瀬遺跡	すずかしやまもとちょう 鈴鹿市山本町	24207	1342	34°57′41″	136°27′47″	20140409	一次調査 54	
						20141014 ～20141024	一次調査 715	
こやしろいせき 小社遺跡	すずかしこやしろちょう 鈴鹿市小社町	24207	1153	34°57′7″	136°27′20″	～20140418 20140812	第３次調査 2,073	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊坂城跡	城館跡	中世	城門（櫓門）・掘立柱建物・礎石建物・石つぶて遺構・井戸・土坑・溝等	土師器（皿・羽釜・茶釜）、陶器（天目茶椀・擂鉢）、中国（明）の染付皿、金属製品（火縄銃の弾・古銭・釘等）、貝殻等	
			掘立柱建物・犬走り状遺構・火葬土坑・土坑・溝等	土師器（皿・羽釜等）、陶器（天目茶椀・擂鉢等）等	
北山Ｃ遺跡	散布地	古墳・弥生	古墳・土壙墓	須恵器（甕・瓶・高杯・杯蓋等）、土師器（甕・高杯）、鉄製品（刀子・鎌等）、石製品（勾玉・砥石等）、埴輪（円筒形、家形）	
北山Ａ遺跡	集落跡	弥生・古墳・飛鳥・奈良	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・ピット	土師器、須恵器、石器	
中野山遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・飛鳥・奈良	縄文時代後期：土坑（袋状土坑など） 古墳時代後期から飛鳥時代：竪穴住居・掘立柱建物・土坑（大型土坑など） 中世：墓	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器	
北山城跡 居林遺跡	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・ピット	弥生土器、土師器、須恵器、石器	
小牧南遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・飛鳥・中世	なし	なし	
椋ノ木遺跡	散布地	古代・中世	溝（落ち込み？）・撹乱	須恵器片、山茶椀片、近現代陶器	
			なし	なし	
			竪穴住居・土坑・溝	弥生土器、土師器、須恵器	
高ノ瀬遺跡	包蔵地	鎌倉	なし	灰釉陶器片、土師器片	
小社遺跡	包蔵地	中世・近世	墓・井戸・土坑・溝・柱穴	土師器、陶磁器、石製品	

要　約	【伊坂城跡】　朝日丘陵の端部に位置する戦国時代の城館跡である。第６次調査は、本丸に相当する曲輪１の北半分、二の丸に相当する曲輪２のほぼ全面を中心に調査を行った。調査の結果、曲輪１において礎石を有する櫓門１棟、掘立柱建物４棟以上、井戸１基、曲輪３において石ろぶで遺構１基、曲輪２において門１基、カマドの可能性を持つ土坑１基などを確認した。曲輪１、曲輪２の北側は斜面を急峻に削ることで守りを固めており、斜面の下端には平坦面が認められた。この平坦面（曲輪11～16）から緩へ斜面が続くが、この斜面については自然地形と判断出来た。また、曲輪６、８、９の西端では自然地形の谷が南北方向に伸びていた。これらから第６次調査区の北側、西側には遺跡範囲が広がらないことが判明した。なお、東側に隣接して第７次調査を実施した。出土した土器から、伊坂城は15世紀末～16世紀後半に築城され、16世紀後半まで城として機能していたと考えられる。 【伊坂城跡】　第７次調査は、今年度調査を行った第６次調査の東側に位置し、第６次調査とは堀切により隔てられている。調査の結果、西区では第６次調査に隣接する平坦地において、掘立柱建物３棟・土坑・溝・柱穴を検出した。平坦地の北側には大走り状の平坦地があり、第６次調査と第７次調査下段の平坦地をつなぐ通路として利用されたと考えられる。また西区の平坦地は土壇状の高まりがあり、盛土により造成されていることが確認された。中区では、火葬土坑と考えられる壁面が被熱により硬化・赤変し、多量の炭化材を含む土坑を２基検出した。うち１基からは骨片が出土している。また、中央部には溝で囲まれた土壇状の高まりが確認されたが性格は不明である。西区・中区の斜面部および東区では部分的に平坦地を確認したものの明確な遺構は確認できなかった。 【北山Ｃ遺跡】　桑名市南部を流れる員弁川の南岸、四日市市にかけて広がる丘陵上に位置する。今回の調査区は、平成25年度の第４次調査の北端、東端と隣接する。調査の結果、新たに21基の方墳と１基の円墳を確認した。墳丘は削平され、大半の古墳は周溝を残すのみであったが、１基で主体部が残存しているのを確認し、そこから刀子が出土した。他の古墳においても周溝埋土から５世紀代の須恵器と土師器、また１基から埴輪が出土した。また、古墳時代の土壙墓が16基確認され、鉄製品および砥石、勾玉が出土した。 【北山Ａ遺跡】　員弁川と朝明川に挟まれた丘陵上に立地している。今回の第６次調査では、土坑、ピットなどとともに、飛鳥時代から奈良時代にかけての竪穴住居２棟、掘立柱建物１棟が確認された。昨年度までに行われた第２次・第３次・第５次調査の結果と合わせると、北山Ａ遺跡に営まれた飛鳥時代から奈良時代にかけての集落には、掘立柱建物が集中して建てられた地区があることが明らかになった。また中野山遺跡の調査結果とも合わせると、この集落は、中野山遺跡の東部の集落と一連であると考えられる。 【中野山遺跡】　第13次発掘調査では、縄文時代の土坑６基、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居15棟・掘立柱建物16棟・大型土坑７基、中世の墓などを確認した。遺構は、調査区東部に集中している。西部には見られないことから。中野山遺跡における集落の西端部と考えられる。縄文時代の袋状土坑を１基確認した。隣接する第９次・第12次調査区でも計６基確認していらが、類例の少ない遺構である。中から後期初頭の土器が出土した。弥生時代の竪穴住居などは見られないものの、ピットから弥生土器片が数点出土した。古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物の中には、方向を同じくして近接するものが数棟見られた。出土した須恵器や土師器からも同時代の遺構と考えられ、計画的に建てられたことが想定される。 【北山城跡・居林遺跡】　員弁川と朝明川に挟まれた丘陵の西側端部に位置している。今回の４次調査は丘陵上の平坦部を中心に、北側に位置する谷頭にかけて調査を行った。調査の結果、丘陵上の平坦部から弥生時代後期から古墳時代前期竪穴住居23棟、掘立柱建物２棟が確認された。その他にも、平安時代の土坑も確認したが、中世の城館に関わる遺構は確認できなかった。 【小牧南遺跡】　３箇所の調査坑を設定したが、いずれの調査坑においても遺構・遺物ともに確認されなかった。（一次調査・165㎡） 【桜ノ木遺跡】　調査坑を４本（Ｔ１～Ｔ４：延長87m）設定して遺構・遺物の有無についての調査を行った。遺物は、Ｔ２から須恵器片・山茶椀片が１点出土したが、大半は近現代の陶器片である。また、いずれの調査坑でも、撹乱と近現代の溝（落ち込み？）を確認したにとどまり、明確な遺構は確認されなかった。（一次調査・174㎡） 【桜ノ木遺跡】　調査坑を４本（Ｔ５～Ｔ８）設定して遺構・遺物の有無について調査を行った。結果、Ｔ５・Ｔ６では造成土が広範囲に入っているのを確認し、Ｔ７・Ｔ８では近現代の耕作に伴うと思われる溝及び地表構造物の埋設物に伴う撹乱を認めた。いずれの調査坑でも遺構・遺物は確認されなかった。（一次調査・186㎡） 【桜ノ木遺跡】　調査の結果、７世紀中頃の竪穴住居５棟と土坑１基、江戸時代以降の溝を複数検出した。竪穴住居はいずれもカマドを持つ。竪穴住居からは、須恵器の甕や杯、土師器の甕や椀等が出土した。また、竪穴住居埋土から弥生土器が出土した。このことから下層遺構存在の可能性が考えられたため下層調査を行ったが、遺構や遺物の確認はなかった。 【高ノ瀬遺跡】　新名神高速道路建設に伴う集落排水管移設工事が行われるにあたって工事立会を行った。総延長54m、幅１mの範囲を調査したが、遺構、遺物ともに確認されなかった。（一次調査・54㎡） 【高ノ瀬遺跡】　調査坑を８本（Ｔ22～Ｔ29）設定し行ったが、安定した遺構検出面は確認されず、遺構も検出されなかった。遺物は、小片が少量出土したが、いずれも撹乱穴からである。（一次調査・715㎡） 【小社遺跡】　縄川北岸に位置する。現況は標高153～155mの北西から南東に向かって傾斜する扇状地に立地し、現況は畑地である。調査の結果、Ａ地区では近世以降と考えられる石列や石組の土坑・溝等が、Ｂ地区では中世後期の遺構と考えられる墓１基・井戸１基・土坑、近世と考えられる掘立柱建物１棟・溝・土坑・柱穴等を確認した。出土遺物は土師器(皿・羽釜・茶釜・焙烙)、瀬戸美濃産陶器(椀・皿・擂鉢)、常滑産陶器（甕・鉢）、青磁等の土器の他、五輪塔（火輪）・石臼等が出土している。

近畿自動車道名古屋神戸線
（四日市 JCT～亀山西 JCT）建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ

２０１５（平成２７）年１０月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　有限会社ミフジ印刷